

41552

教科書文庫

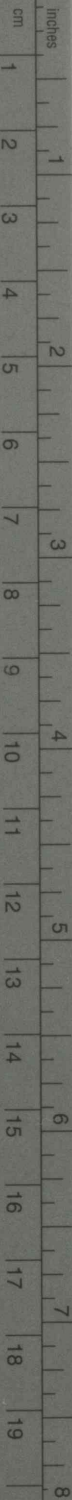
4
810
41-1937
20000 41461

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

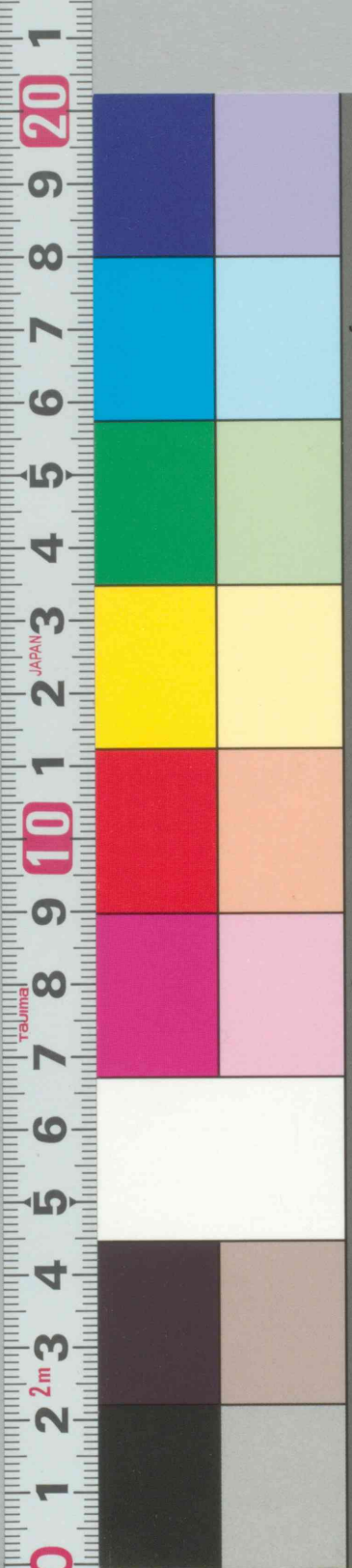
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759  
Set A  
資料室

新編國文讀本

改制版卷六



日二十二月二十年二十和昭  
濟定檢省部文  
科語國校學業實·科文漢語國校學中

資料室

3359  
Set 4

千田憲編

新編國文讀本

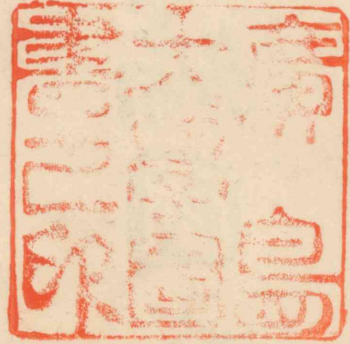
改制版

東京右文書院藏版

「正倉院拜觀」参照



正倉院



新編國文讀本 改制版 卷六

目次

一 我が國神話の特質	芳賀矢一	一
二 正倉院拜觀記	藤代禎輔	五
三 木 精	森 鷗 外	一三
四 茸の香	薄田泣菫	二〇
五 オリンピヤの回顧	黑板勝美	二四
六 自然の寂光	吉江喬松	二九
七 鹽 原	尾崎紅葉	三五
八 讀書の選擇	佐々醒雪	四一

九 九郎判官……………「義經記」……………四六

一 太刀取り……………四六

二 浮島が原の對面……………五〇

一〇 小泉先生の舊居を訪ふ……………厨川白村……………五六

一一 柔術……………小泉八雲……………六六

一二 内藏助と主税……………大佛次郎……………七二

一三 母に奉る……………大高源吾……………八〇

一四 聯合艦隊解散告別の辭……………東郷平八郎……………八六

一五 おらが春……………小林一茶……………九〇

一 おらが春……………九〇

二 やせ蛙……………九二

一六 涼しい心……………前田慧雲……………九四

一七 樹の根……………和辻哲郎……………九八

一八 大塔宮……………「太平記」……………一〇五

一 高嶺の雲……………一〇五

二 藏王堂……………一一二

一九 雪聲……………綱島梁川……………一八

二〇 三顧の恩……………土井晩翠……………二〇

二一 しみのすみか物語……………石川雅望……………二五

一 白髪三千丈……………一二五

二 桶屋の思案……………一二六

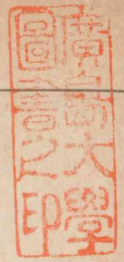
三 すなほなる修行者……………一二八

二二 うた物語……………「古今著聞集」……………一三〇

一 關の秋風……………一三〇

二 母のいのり	一三一
三 いく野の道	一三二
四 青柳の絲	一三三
二三 大和國原	「短歌」一三五
二四 勞働の一日	高須芳次郎 一三九
二五 思出	薄田泣菫 一四二
二六 國語の愛護	五十嵐 力 一四五
二七 南國と我が國民	竹越三又 一五二
二八 國難と皇室	渡邊幾治郎 一五七
二九 吉野拾遺	「吉野拾遺」一六二
一 熊王の發心	一六二
二 いのり直し	一六七

附録 辨似一覽  
時刻方法・五行・十干・十二支・月の異名



### 新編國文讀本 改制版 卷六

芳賀矢一

福井縣の人、國文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

神話 反映

檉原  
今の福岡縣博多附近なりといふ。

#### 一 我が國神話の特質 芳賀矢一

國史は神話にはじまる。神話は明らかに我が國體を表明し、我が國民性を反映せり。伊弉諾伊弉册の二神天真柱を廻り、まづ大八洲の國土を生成し、尋いで風水木土の神々を産み、火神を産むに及びて、女神黄泉國に下り給ふ。男神これを追ひて黄泉に至り、女神の屍を見て、穢に觸れたりとして、檉原に禊し給ふ。この時生れいで給へるは、即ち天照大神素盞鳴神月讀神の三神とす。故に我が國土と天照大神とは正しく御兄弟にして、國土と皇室との離るべからざる關係は、これによりて明白なり。天

一 我が國神話の特質

寶祚

照大神の御孫瓊々杵尊に至りて、始めてこの國土に君臨し給ふ。この時大神は神鏡を授けて、これを視ることなほ朕が如くなれ。寶祚は天地とともに長久ならん」と勅す。これ即ち祖先崇拜の國風を言明し、萬世一系の國體を宣傳せられたるなり。これより先素盞鳴神は早く出雲にありて徳化を布き給ひ、今や五世大國主命の世に當れり。命の天孫の命を聽きて、その國土を譲り給ひしは、大八洲の國土もとよりその宗家の君臨し給ふべき地なればなり。凡そ神話にあらはるゝ天神國神その數多しと雖も、天孫に向つて敵抗せんとするものは一もこれあらず。天照大神が天の窟戸に隠れ給ふや、八百萬の神は神集ひに集ひ、神議りに議りて、ひたすらに大神の光明の再び六合を照らさんことを冀へり。上下一致精忠無比、君臣の分明らかに定めり。天孫の後裔は皇祖直系の繼承者として、天下公民の宗家として、長く

宗家

神集ひ

六合

毫も

天皇と仰がれ給ひ、以て祖廟祭祀の業を嗣ぎ給ふこと、太古より今日に至るまで毫も變ることなし。

いそしむ

我が國の古名を豐葦原瑞穂國といふ。國民の生業は農を以て本とす。天照大神營田をいとなみ給ひ、また齋服殿を建てて機織の業にいそしみ給ふ。太陽神としてかばかり溫和にかばかり勤勉なるは、世界の神話になきところなり。素盞鳴神が追放せられ給ふは、畔放重播の罪に起因し、新嘗の時新宮を汚し給ひしによる。大年神宇賀御魂神、皆農事の神にして、大國主神と事代主神とを紹介せる久延毘古は、一名山田曾富騰にして即ち案山子なり。よつて以て農業が我が神話を一貫せるを知るべく、また以て上代國民の生活状態を見るべし。毎年の新嘗祭、歴世の大嘗會は、傳へて以て今日に至れり。我が國の山川は秀麗にして、我が國の氣候は溫和なり。この

大嘗會

稼穡 現身 盟約 敬虔 閑雅 該當

間に於て豊饒の野に耕せる我が農民の生活の如何に平和なりしかは、神話中に何等の争奪なく、何事の紛擾を傳へざるを以ても知るべし。「荒ぶる神」の語あれども、荒びたる行爲はなく、死して黄泉國に行く思想はあれど、死後の世の如何を語らず。樂しむところは現世にして、恐るゝところは風雨稼穡の害のみ。天地の神祇を祭り、祖宗の靈魂を拜し、ひたすら現身の禍害の及ばざらんことを求む。神の意は占にて知るべく、盟約にもあらはるべく、夢にても告げらるべし。神を祭るに敬虔を盡せる儀容は、自ら相互の間の禮節となり、神を祭るに不淨を厭ふ風は、清淨高潔の精神を養成せり。身の汚は即ち心の汚にして、罪科これより生ず。溫和なる天然の風光を愛し、君臣父子相睦ぶ、その言語に母韻多くして優長なる、敬語に富みて閑雅の趣多き、自らその國民性の溫和醇乎なるに該當せりといふべし。  
—(國文學歴史代選)—

## 二 正倉院拜觀記

藤代禎輔

藤代禎輔  
素人と號す、千葉縣の人、獨文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十。

今年の十月であつたが、正倉院の御蟲干で、御物の拜觀が出来ると聞いて出掛けた。京都からなら日がへりて樂に行けるのであるが、少し外にも見物したい所もあるので、前日から行つて一晩泊つた。

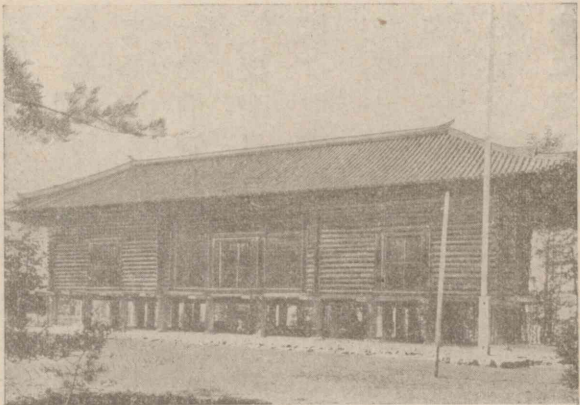
夜奈良の町を歩いて見ると、至極靜かで、對山樓から興福寺を抜けて猿澤の池へ出るまで、人一人にも出遇はぬ。鹿の聲が聞えるかと耳を澄ましてゐたが、どうした譯か毫も聞えなかつた。翌朝五時半に起きて、春日の森を散歩した。すると、今朝は鹿の聲が彼方此方であつた。春日神社は修繕中で、中に這入れないから、玉垣の外から遙拜し、手向山八幡宮、三月堂、二月堂、鐘樓、大佛殿と順次に見物して、一先づ旅宿に歸り、朝餉を

對山樓  
奈良市にある旅館の名。



した、初めてから正倉院に出向いた。

平城舊都一條大路に當る轉害門、又の名景清門を抜けて、大佛供養の時惡七兵衛景清がこの門に潜んで、將軍賴朝を討たうとしたといふ傳説を思ひ出し、間もなく正倉院に著いて控室に上ると、雷名四海に轟く某\*將軍が來て居られる。博物館長の紹介で、將軍に名乗を揚げる。嗚呼今日は如何なる吉日ぞ。この世界的偉人と御近づきに成り、驥尾に附して御物を拜觀する榮を得た。頓て係官の先導で拜觀の裝飾を施した琵琶、阮咸等の樂器



正倉院

惡七兵衛  
平忠清の次男、伯父を殺したるにより、世人惡七兵衛と呼ぶ。

雷名

某將軍  
乃木大將のこと。

驥尾に附して……  
「帝報」以ニ手書ニ  
曰、蒼蠅之飛、不レ過ニ數歩ニ、即託ニ驥尾ニ、得ニ以絶ニ群ニ、  
(後漢書、陳壽傳)

一驚を喫す

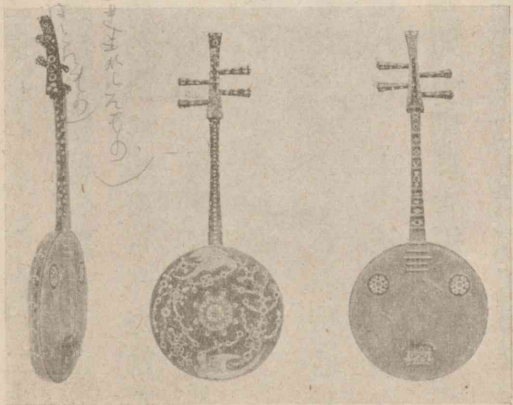
石突

目貫

燦爛

七寶

を見て、細工の精巧に一驚を喫し、聖武天皇の御使用の仕込杖と聽いて、千二百年以前既にこの工夫があり、而も現今の物に優るとも劣るまじき装置に再驚を喫した。將軍はこの仕込杖に深き興味を寄せられ、石突の工合に注意し、刀身の諸刃なるか、片刃なるかを確かめ、銘の有無、目貫の孔の數を質し、柄に鮫皮が用ゐるありと聽き、當時の工藝の進歩に驚かれる様であつた。それから蒔繪の碁盤硬玉及び赤珊瑚の碁石、鳥毛屏風の下繪等、何れ目も驚かさぬ物はないが、取分け金銀珠玉を鏤めた鏡類の燦爛目を奪ふ立派さ、見事さ、中にも一面七寶の裝飾を加へた鏡は、外國人

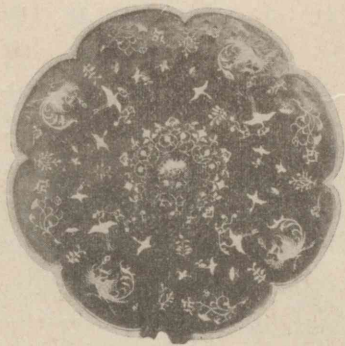


螺鈿紫檀阮咸

垂涎

が垂涎を禁ずる能はざる世界の逸品であるさうだ。長らく武蔵  
聖武天皇の御寢臺は、長さといひ幅といひ實に大きな物であ  
るが、將軍は委しくその寸法を測つて居られた。中倉の二階で

惠美押勝  
本名は藤原仲磨、  
孝謙天皇の寵を受  
け惠美押勝の姓名  
を賜はる、天平寶  
字八年(四四)亂を  
起して誅せらる。  
職掌から



鏡角八背鳥花脱平銀金

あつたが、刀劍弓矢槍戟の類が澤山ある。  
是は惠美押勝の亂に用ゐられた物であ  
るとかいふ。普通の觀覽者は一通り目  
を通しただけで、さつさと過去つてしま  
ふのであるが、將軍は職掌から特に綿密  
な注意を拂はれた。先づ長槍の柄の卷  
方、石突の工合を仔細に點檢され、刀劍類の細部を逐一取調べて、  
「後世今日に至るまでの種類は、天平時代に一も缺けてゐない。」と  
語られて、それから弓矢に就いては、矢の羽根は二枚か。」と問はれ、  
「二枚のも、その他如何なる種類のもあり、鏑矢までも備はつてゐ



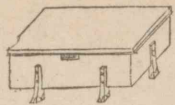
鏑矢



雁股

故實

細密



櫃唐

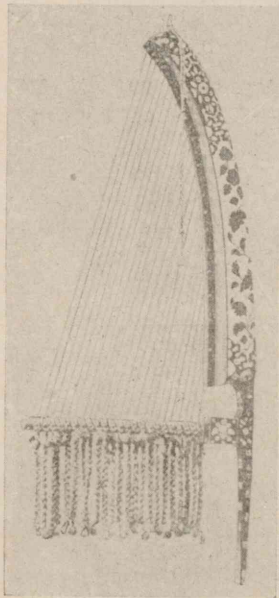
る。」と係官は答へる。矢の根も總ての種類があると聽いて、雁股  
の矢の根があるか、雁股ならば、四枚羽の筈なり。」と問はれ、係官は  
何れも然る旨を答へた。聽手も聽手なら、答手も答手で、この故  
實上の問答は、實に意外の聽物で、傍聽の我々どもは思はぬ新知  
識を授けられたの  
である。

將軍の用意周到  
なることは、専門の  
武具馬具に限らず、  
何事にかけても非凡であつて、錠前の種類、唐櫃の蓋の厚みに至  
るまで目を留められ、經筒の構造に至るまで細密な觀察を遂げ、  
その質問の細かいこと、竝大抵の係官では答辯に困るだらうと  
思はれるくらゐ。我々の先導者は、八年以上この御蟲干の爲東



繪風屏女立毛鳥

京から年々出張するといふ老練家であるから、如何なる質問に逢つてもよどみなく答へるので、聴いてゐても心持が好かつた。次に箏篋といふ樂器は、西洋の豎琴に似たものであるとかねて聞いてゐたから、特別の興味を以て迎へたのであるが、何様よ



箏篋

ほど珍らしいもので、支那人がこの箏篋や阮咸を見て、此等の樂器は書物の上で見るばかりで、實物を見るのは今が初

めてだと言つて感歎するさうである。

この外、東羅馬帝國の遺物といはれる玉水晶乃至玻璃の器具や、唐櫃の外部にある密陀繪の如きは、是亦全世界に類のない逸品ださうで、西洋の博物館にこの類があつても、何れも土中から

東羅馬帝國  
ビザンチン帝國ともいふ、西曆三九五年アルカヂウス帝に肇り、一四五三年トルコ人に滅さる。  
密陀繪

星霜

發掘した品であるから、見る影もなく破損されてゐるが、正倉院の御物はこれを一つ取出して見せられたら、とても千年以上の星霜を経たものとは思はれぬほど鮮かだ、艶やかな品である。

校倉

最も不思議に思はれるのは、矢竹や筆の軸に毫も蟲喰の跡がなく、料紙も天平時代の物が、今新しく漉きあげたばかりと思はれる有様に保存せられてゐることである。是は奈良の土地が乾燥してゐると、校倉の構造が宜しいのと、手入の行届く爲であるには相違ないが、一時は随分投げやりにせられて、乞食が縁の下で焚火をしたといふ噂もあるし、落雷の痕も歴々と存してゐる所を見ると、實に一の奇蹟である。是も偏に世界に無比な萬世一系の我が皇室の御稜威の彌高きを示すものであつて、是こそ我々が宇内に向つて誇り得る一大寶庫である。

（文藝と人生）

字内

奇蹟

三木精

森 鷗 外

森鷗外  
名は林太郎、鳥根  
縣の人、文學博士、  
醫學博士、陸軍軍  
醫總監、大正十一  
年歿、年六十三。

深山薄雪草



ブロンド

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が始め  
て深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのは、こゝの谷間である。  
フランツはいつもこゝへ来てハルロオと呼ぶ。麻のやうなブ  
ロンドの頭を振立てて、高音でハルロオと呼ぶのである。呼ん  
でしまつて、じいつとして待つてゐる。暫くすると、大きい鈍い  
最低音で、ハルロオと答へる。これが木精である。

フランツはなんにも知らない。唯暖かい野の朝、雲雀が飛立  
つて鳴くやうに、冷たい叢の夕、蟋蟀せみが忍びやかに鳴くやうに、こ  
こへ来てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれる  
のが嬉しい。木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べ  
ば、答へるのが當り前である。日の明るく照つてゐる處に立つ

てゐれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるの  
ではない。立つてゐれば、影がさすのが當り前である。そして

その當り前のことが嬉しいのである。

フランツは、父が麓の町から始めて小  
アさい杓を買つて来て穿かせてくれた時  
から、こゝへ来てハルロオと呼ぶ。呼べ  
ば、いつでも木精の答へないことはない。  
フランツはだん／＼大きくなつた。  
そして父の手傳をさせられるやうにな  
つた。それで久しい間、例の巖の前へ來  
ずにゐた。

或日の朝である。山を一面に包んで  
みた雪が巖にだけ残つて、方々の樅の木立が緑の色を現して、深



山の村

田叔

さび  
次高音

い深い谷川の底を水がごうくと鳴つて流れる頃のことである。フランツは久しぶりで例の巖の前に来た。そして例のやうにハルロオと呼んだ。麻のやうなブロンドの頭を振立てて呼んだ。併し聲は少しさびを帯びた次高音になつてゐるのである。呼んで了つて、じいつとして待つてゐる。暫くして、もう木精が答へる頃だなと思ふのに、山はひつそりして、なんにも聞えない。唯深い深い谷川がごうくと鳴つてゐるばかりである。

フランツは、久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くじいつとして待つてゐた。木精はやはり答へない。フランツはじいつとして、いつまでも待つてゐる。木精はいつまでも答へない。

麻痺

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。そして又じいつとして待つてゐる。もう答へる筈だと思ふ時間が経つ。山はひつそりしてゐて、ごうくといふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つたほどの時間が経つ。聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまでは、フランツは唯不思議だ不思議だと思つてゐたばかりであつたが、この時になつて、急に何ともいへないほど心細く寂しくなつた。譬へば、これまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツ

眩く

の頭に觸れたのである。フランツは麻のやうなブロンドの髪が一本一本逆さまに立つやうな心持がして、見るともなしに身のまはりを見廻した。目に觸れるほどのものに、なんの變つたこともない。目の前には例の巖が屏風の様に立つてゐる。日の光がところどころ霧の幕を穿つて、樅の木立を現してゐる。風の少しもない日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見てゐた樅の木立が又隠れる。谷川の音の鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牡牛の頸に懸けてある鈴であらう。フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいつと考へてゐる。餘り不思議なので、夢ではないかとも思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。暫くしてフランツは、何か思ひ附いたといふやうな風で、木精は死んだのだ。」と眩いた。そしてほんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

まろがる

同じ日の夕方であつた。フランツは、どうも木精のことが氣に掛つてならないので、又例の巖の處へ出掛けた。

この日、丁度午後から極く軽い風が吹いて、高い處にも、低い處にもまろがつてゐた雲が、少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が、一つ二つ見えて來た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔といふ巔が、藍色に晴渡つた空にはつきりと描かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帯びた紅に匂ふのである。

紅に匂ふ

フランツが例の巖の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞馴れた、大きい鈍い最低音の木精の聲である。フランツは、「おや、木精だ。」と覺えず耳を敬てた。そして何を考へる隙もなく駈出した。例の巖の處に、子供の集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリューネットの髪を

ブリューネット

三木 精

山の草が泥土の中を這つてゐる。木精の聲は、岩のすき間に響いてゐる。子供は七人、皆ブリューネットの髪を

してゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。フランツはつひぞ見たことのない子供の群を見て、氣がねをして立止つた。子供達は皆じいつとして、木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んで了ふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい底力のある聲である。

暫くすると、木精が答へた。大きい大きい聲である。山々に響き、谷々に響く。空に聳えてゐる山々の巔は、この時鮮かな紅に染る。そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色に浸されて行く。知らぬ七人の子供達は皆じいつとして、木精の聲尻が微かになつて消えて了ふまで聞いてゐる。どの子の顔にも喜びの色が輝いてゐる。その色は生の色である。群を離れて、やはりじいつとして聞いてゐるフランツの顔にも喜びが閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

踵を旋らす

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんなことを考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達が、そこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないで、木精が死んだかと思つたのは間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。今度呼んで見たら答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、たうとう闇に包まれて了つた。村の家にちらほら燈火が點き始めた。

—(鷗外全集)—

薄田泣菫

名は淳介、岡山縣の人、詩人、明治十年生。

醍醐

醍醐寺、京都市伏見區醍醐町にあり、眞言宗醍醐派總本山。

非時

僧家のミテテ後、  
底の時ミテテ後、  
フエトミテテ後、  
時トイフ

はしり

### 四 茸の香

薄田泣菫

私は今、上醍醐の山坊で、非時の饗應を享けてゐる。

坊は谿間の崖に臨んで建てかけた新建で、崖の中ほどからによつきりと起きあがつて欄干の前でぱつと両手を擴げたやうな楓の古木がある。こんもりとしたその枝を通して、段々くだりの谿底に、蹲踞んだやうな寺の建物が見え、その屋根を見わたしに、遙かあなたの山根に、小ぼけな田舎家が零れたやうに散らばつてゐて、あんな土地にも人が住んでゐるかと思はしめる。

吸物の蓋を取ると、はしりの松茸で、芳しい匂がぶんと鼻に應へる。給仕の役僧は、「如何だ」といつた風に眼で笑つて、そしてかう言つた。

「折角の御越しですから、山中捜しましたが、唯一本しか見つかりませんので……」

楓の枝に松潜まつかづに似た小さな鳥が飛んで来て、そゝくさと樹肌を啄いてゐたが、それも飽いたといつた風に、ひよいとこちら向きに向きなほつて、珍らしさうにきよろつきながら、啞のやうに黙りこくつてゐる。

茸を噛むと、秋の香が齷くさに沁むやうな氣持がする。味覺の發達した今の人の物をたべるのは、その持前の味以外に、色を食べ、香氣を食べ、また趣致を食べるので、早い話が蔓荔枝まんりしを嗜くといふ人は、あくどいその色をも食べるので、海鼠うしを好むといふ人は、俗ばなれのしたその趣をも食べるのである。香氣にしてからがさうで、石花菜せいかさいを食べるのは海うみの匂を味はひ、香魚かうぎょを食べるのは淡水の匂を味はふので、今かうして茸を食べるのは、やがてまた山の匂を味はふのである。山もこの頃のは、下しめりのした

齷

蔓荔枝



海鼠



石花菜





壺物 胡桃



かく安

冷たい土の香である。  
 こんな事を考へながら、茸を味はつてゐると、今日この頃、つひぞ物を味はひしめるといふほどの餘裕が無くなつてゐたのに氣がついた。唯もう口腹の慾を充たすといふのみで、どんな物も皆同じやうに掻込んで、ぐつと呑み下すに過ぎなかつた。若しひよつとして、壺物の中に、胡桃の殻でも混つて居らうなら、私は何の氣も附かずに、それをもつい噛み割つたかも知れぬ。私達の味覺は、嗅覺だの聽覺だのと一緒に、漸次と纖細に緻密になつて來たに相違ないが、その一面にはお互の生活に、殆どゆとり、物を味はふといふほどの餘裕が無くなつて、どうかすると刺戟性のもので、かく安にてつとり早く味覺の満足を購ふといつた風になりがちなので、感覺の敏さが段々と弛んで、しまひには痺れかゝつて來るのではあるまいか。さうすると、私達も何時か

岩間寺 法正寺、大津市石山内畑町にあり。

微せき  
 可なり  
 三ノ三ノ三

は茸のやうな、こんなほのかな風味に舌鼓を打つ興味は感じなくなつてしまふかも知れぬ。  
 吸物は吸ひ盡した。小僧は「お代りを」といつて、塗の剥げた盆をさしつけた。

松潛に似た例の小鳥はもう楓の枝に居らぬ。十二番の岩間寺へ越す巡禮の者であらう、眠いやうな御詠歌の節が山越しに響いて、それも遂に聞えなくなつてしまつた。

—(泣菫文集)—

つくづく、ぼふしの聲に、世は何時しか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、たゞ一株、前の家主の植ゑのこしたる黄菊も咲きいづ。名苑の美しといふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、却つてわが庭の一枝にあるべし。

屋後に銀杏あり。秋深くして、滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、扇の如きその葉翻りおつ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。

(徳富蘆花)

黑板勝美

長崎縣の人、國史學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治七年生。

古コリントの廢墟に遊び、アクロコリントに登臨の快を恣にしたる余は、一夜の夢を寂しき客棧に結び、翌くる朝汽車に搭じてオリンピヤに向つた。碧波青嵐の間を縫うて、西に走りつゝ、車窓に凭りて眼を放てば、オリイブの森茂れるあたり、舊路の見えつ隠れつするに、古代希臘の勇士がその市々の名譽を雙肩に荷つて、オリンピヤの大競技會に馳せ參ぜんと、駒を竝べ、サンダル踏みしめて急げるさまも胸中に描かれ、身は二千年の昔に生れたらん心地して、覺えず肉躍り骨鳴るのであつた。

五 オリンピヤの回顧

黑板勝美

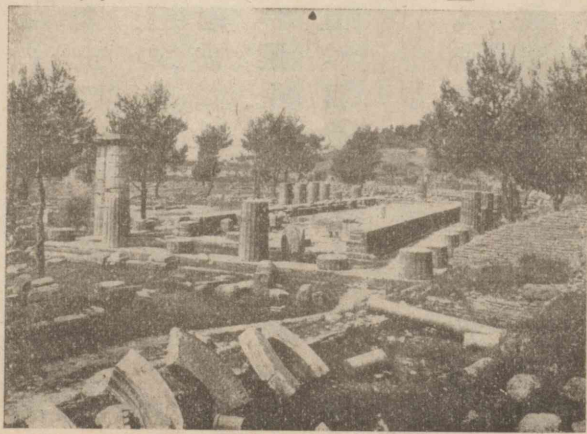
オリンピヤの丘。アクロコリントコリント市近郊の丘。オリンピヤ希臘モレア半島にある古代希臘の聖地。サンダルアルフェウスオリンピヤ近くの川の名。

いよ／＼アルフェウスの谷にかゝれば、やがて平和の榮光に満ちしオリンピヤに著く。クロニオン丘青葉茂るところ、その麓にオリンピヤの廢墟は永久に横たはつてゐる。中央なるゼウス神殿、大ギムナジウムの趾、寶藏さては神殿など、一々指點すべく、その彫刻遺物は遙か此方の博物館に手際よく陳列されてゐる。

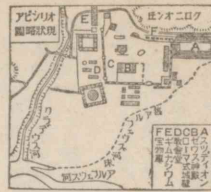
ゼウス 古代希臘の神の名  
オリンピヤ十二神 最高の神  
ギムナジウム 古代希臘の青年體育訓練所

シリオン 北アフリカの希臘の舊植民地シリネイカの首都。  
シラキウス シシリ島南東部の港都。

オリンピヤのゼウス神は、希臘全土の信仰篤かつた神で、その大祭は四年に一度嚴かに執り行はれた。この日には南は阿弗利加のシリオン、西は伊太利のシラキウス、東は小細亞のあたりまで、苟くも希臘人の住んでゐたところから、幾千幾萬の人々が此處に集ひ來たつたのである。この廢墟の奥に一部分發掘された競技場の趾は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔓かつら高く繁合



墟廢のヤピンリオ



龍虎相搏つ

つて、羅馬時代に建てられた凱旋門の半ば壞れたるに纏るのが、  
いかにも名譽の月桂冠であるかのやうである。  
このオリンピックの大競技は四年ごとの大祭日に催された。そ  
して神聖なる平和の日として、希臘全土の人々は、敵味方を忘れ  
てこれに列したのである。希臘全土の一致結合は、まことにこ  
の大競技によりて出来たといふも過言ではない。國民全體が  
愉しく此處に集り來たり、各市選抜の選士が、雲を呼び風を起し、  
龍虎相搏ちしさまは、いかに壯快に且つ目覺ましかつたことであ  
らうか。

集り來たつた人々の中には、詩人もあつたであらう、學者もあ  
つたであらう。さては武名赫々たる勇將も、政治家も、法律家も  
あつたであらう。富めるも、貧しきも、名門も、平民も、あらゆる階  
級、あらゆる職業の人々が互に顔を合せ、談笑周旋しつゝ、この間

ペルシヤ戦争  
西暦紀元前五世紀  
の前半、ペルシヤ  
と希臘との間に行  
はれし前後約五十  
年に互る戦争、ペ  
ルシヤは前後三回  
希臘に進ませしも  
その度に阻まれて  
遂に和を請ふに至  
れり。

を徘徊したるさまの、いかに面白く且つ賑やかなりしことであ  
らうか。想ふにこの大競技は、單に競技そのものの進歩を促し  
たばかりではなく、哲學、歴史、文藝、音楽、彫刻、繪畫などの發達に影  
響したところも少々ではなかつたであらう。この祭にはまた  
市場が立つことになつてゐた。かくて思想、知識の交換ひいて  
は感情の融和が、國民の一致結合に暗々裏に貢献するところが  
あつたと同時に、商工業の發達にも相影響したものが多かつた  
のである。彼等がかのペルシヤ戦争に於て、一致協力して大敵  
に當り、よく東方の強を挫くことが出来たのは、このオリンピック  
の大競技に負ふところが少なくないと思ふ。

しかもその競技に参加したのは、職業的の者ではなく、皆各市  
より選ばれた青年選士であつた。即ちこの競技は全國民をし  
て眞の勇者たらしむるにあり、全國民の體格と意思の發達は、こ

モットー

オリンピヤの祭典

起源不明なるも、希臘人は西曆紀元前七七六年を以てオリンピヤ紀元とし、西曆三九四年羅馬皇帝テオドシウス大帝に禁止せらるゝまで續きたり。  
オリンピヤ競技の復活  
第一回は西曆一八九六年に希臘の雅典に開催せられたり。

の競技によつて益、助長せられたのである。古代希臘に於ける教育のモットーは、健全なる精神は健全なる肉體に宿る。といふことであつた。かくて彼等は、たゞこの健全なる國民精神を養成するため、健全なる肉體を作ること苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れてゐる。希臘の文學にもこの意味が見えてゐる。

オリンピヤの祭典は、かくて希臘の歴史はじまつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。西曆一千八百九十四年に、國際オリンピツク委員會が組織せられて、古代のオリンピヤ競技の復活が議せられ、その後四年ごとに世界各国から選士を集めて、大競技會を開くことになつたのも、全くこれのためである。

(西遊二年歐米文明記)

### 六 自然の寂光

吉江喬松

吉江喬松

孤雁と號す、長野縣の人、文學博士、早稻田大學教授、明治十三年生。

去年  
大正十一年。

秋から冬にかけての日本の空は、北および西の歐羅巴には見られない清澄な輝かしさを持つてゐる。殊に氣候の變化の烈しかつた去年の後半は、日本の秋を一層鮮かに彩つた。南歐に見る如き光ある日本の空は、いつもより一層の紺青を深め、輝く黄金の萬片をこの大空の下に翻してゐる、いかにも東洋らしい銀杏樹をして、いつもよりは一層嚴かな姿を、清澄の空氣の中に恣にさせてゐた。

輝く光は日本に住む者の悦びである。いかに砂塵と、無秩序と、喧騒と、焦慮と、疲勞と、困憊とのうづまく日本の首都の上にも、この秋の寂光は一道の清涼の氣を漂はせて、人々の胸の中にまで、一時の靜穩を植ゑつけずには置かない。

喧騒  
困憊  
寂光

いぶせし

わびし

けんな眼

日本の澄み渡る寂光かやかしんの十一月は、パリにおいては曇天いつとほのいぶせき天候てんこうのみのつゞく季節である。さらにロンドンならば最早濃はやい霧が全市を包んで、方三尺の世界しか我々は持ち得ない極めて窮屈きうくつなわびしい時節である。パリのこの打續く曇が破れて、時とすると一時の幻影まぼろしの如く、廓外くわくがいの森林の頂を黄に染め出し、うす青い空をのぞかせ、忙がしげに響く衆鐘しゆじゆの合唱を都會の上にとゞろかせ、雲の中に途を失つてゐた渡り鳥の群を俄に元氣づかせ、あわたゞしい悦びを人々の胸に蘇よみがへらせることがある。また時とするとロンドンの濃い霧が、一層濃くかたまつて雨となつた後などには、薄い日の光が天の一方から落ちて、思ひもよらない街路まちみちの角の薄灰色の建物の壁を照らし出すことがある。路を行く人は、何か思ひもよらぬ不思議なものに打當りでもしたやうに、けんな眼をじつと、その照らし出された壁上

郷愁

焦慮

にやつたばかりで、黙々として通つて行つてしまふ。そんないぶせき都會にゐる日本人ならば、又そんな一時の光の戯あそびに接してもするならば、必ず秋の故國を思ふ。寂光の故郷を思ひ出す。日本人が他國にゐて思ひ出すのは、この秋の光である、我々が持つ郷愁きやうしゆは、この光、寂光に對する思慕しむの情である。我々は南方を慕ふ心を持つてゐるが、たゞり落つる目くるめく赤熱せつをこふのではない。我々は北方を愛するけれど、闇の與ふる不氣味さ、恐ろしさ、殘忍ざんじんさを愛するのではない。赤熱の中に漂ふ静けさ、闇に浮ぶ微かなる光、即ち寂光を求めてゐるのである。

この寂光が奪はるゝ時、我々の心には、一種の焦慮ちやうりが生れる、混亂らんが生ずる、郷土思慕が胸をかき亂す。右往し左往して落著く所を知らなくさせる。

錦繡

白樺



オルグ  
フランス語、風琴  
即ちオルガン。

萬物が屏息する、  
冬の前、即ち

秋の森は一つの會堂である。こゝに朽ちゆく木の葉の香が漂ひ、こゝに萬片の錦繡が飜り、静寂の中にとけ込む如き、ひき入るゝ如き悠久の思がある。黄葉に飾られた白樺の林の中で、その黄葉の間をすかして眺めらるゝ、清澄なる空の色、原始時代の人には、神の衣の裾とも思はれたでもあらう。渡り鳥の群は巡禮者の隊の如く、一群また一群とこゝをめぐめて集り、散ずる。樹々の間を靜かに渡る風の響は、一種のオルグの音の如く、幹は群立する會堂の圓柱である。

最後の輝き、秋の光榮のなかに、人は水の如く冷たく澄んだ一種の默せる胸に徹する力を覚える。彼は秋の輝きの中で歌はんとせず、寧ろ散りしく木の葉の囁きに耳を傾け、大地に眼を伏せて、黙々としてこの天地の奏樂の中を歩み行かうとする。彼は春の森に於けるが如く、梢をかすめて流るゝ雲と共に、ゆるやかに溶けて流るゝのを覚えるのではない。大同化の悅樂のなかに自己を忘れるのではない。彼は夏の草原に臥して、地氣とその發生とを身に感じて、自然の野生の動きに身を委せるが如きではない。秋の森では、彼は流れ散る中に、自分を立てねばならぬ。自分をつかまねばならぬ。默想が生じ、反省が起る。口を噤んで、空へ眼をやり、地へ視線をおとす。彼の感覺は開放せられても、彼の生命は純化せられて、透明となつて、或一點に立たねばならぬ。

それ故、秋になれば人は故國を思ふ情にたへられぬ。旅愁が胸に湧く。郷愁が彼をして開き切つた感覺の中に礎をおろさしめる。かつて死刑の宣告を言渡さるゝ、囚人があつた。彼はその宣告と理由とを長々言聞かされてゐる間、不圖眼を仰いで、法廷の

大同化

旅愁

閃影

高い天井を眺めやつた。その天井近い一角から紺青の空の一片が、ほんの一片が、青い閃影をのぞかせてゐた。彼はそれに見入るともなく見入つてゐるうちに、自分が今死刑の宣告を受けつゝあることも忘れて、かつて秋の野原を日の光を享けてのびのびと飛びまはつてゐた事を思ひ出した。枯草の匂すら彼の鼻を襲つた。彼は幸福であつた。彼には死刑など忘れさせた。死の報告を、しかも人の手によつてもち來たさるゝ死などを聞かされて、いら立つが常なる人の心に、空は永久の靜寂をその青色のなかに漂はせて、彼の心の中へ一種の寂光を注ぎ込んだのであらう。彼は吸ひこまるゝやうに、その寂光の中へ身をまかせて微笑した。

暗黒はおそろしい、燦爛目を奪ふ光は狂はしい。自然のなかの寂光のみが、我々の生命を育ててゆく。

（自然の寂光）

尾崎紅葉

名は徳太郎、東京市の人、小説家、明治三十六年歿、年三十七。

鹽原

栃木縣鹽谷郡鹽原温泉。

西那須野の驛

栃木縣那須郡大田原の西に在る東北本線の停車場。

淙々

九折

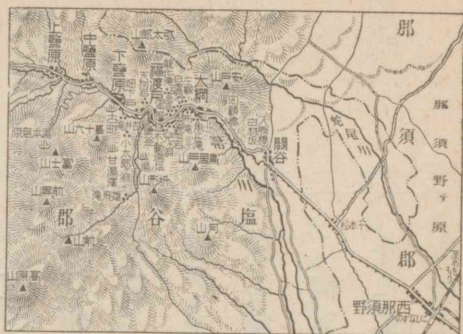
七 鹽 原

尾崎紅葉

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我はかはらざるその悒鬱を抱きて、遣る方なき五時間のひとりに倦み憊れつゝ、始めて西<sup>\*</sup>那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今猶茫々たる古の那須野ヶ原に入れば、天は闊く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に淙淙の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

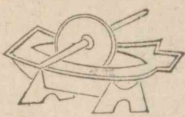
輒ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹に聲々の鳥鳴き、前には幽草歩々の花を發き、愈登れば、遙かに木隠れの音



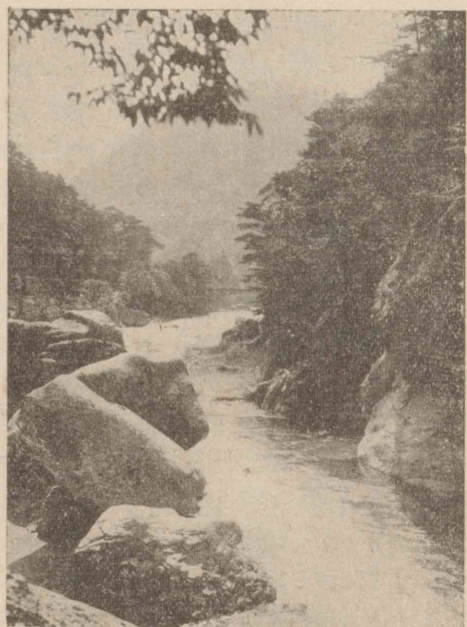
此の緒よりや  
「琴の音に峯の松  
風通ふらしいづれ  
の緒よりしらすそ  
めけん」(拾遺集)

のみ聞えし流の水は浅く露れて、すはや、こゝに空山の  
雷白光を放ちて頽れ落ちたるかと凄まじかり。道の右  
は山を削りて長壁となし、石幽かに蘚碧うして、幾條とも  
なく白絲を亂し懸けたる細瀑小瀧の珊々として灑げる  
は、嶺上の松の調も定めて此の緒よりやと見捨て難し。  
車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛  
瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、  
道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。  
山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あ  
れば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。猶數ふ  
れば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。  
抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西  
北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨の、四里に岐れ、十一里

巖巖



研藥



流溪の川箒

に互りて、到る處、巖巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に  
溜璃末を碎くに似たり。先づ大綱の湯を過ぐれば、根本山、魚止  
瀧、兒ヶ淵、左靱の險は古  
りて、白雲洞は朗かに、布  
瀧、龍ヶ鼻、材木岩、五色岩  
船岩などと眺め行け  
ば、鳥居戸、前山の翠衣に  
染みて、福渡戸の里に入  
るなり。

途すがら前面の崖の  
處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興あり。此の邊殊に谿  
浅く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岩樹は  
陰々として眠るに似たり。車夫を顧みて處の名を問へば不動



澤といふ。

遙かに望めば、行路の雲間に塞りて、咄々、何等の物かと先づ驚かざる、異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見上ぐる絶頂には、ばらばら松も危く立ち竦み、幹竹割に割放ちたる断面は半空より一文字に垂下して、岌々たる其の勢、ほとんど眺むる眼も留らず。「是こそ名にし負ふ天狗巖」としたり顔に車夫は案内す。

足に任せて、彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて、高さ二丈に餘り、その頂は平に闊がりて、ゆたかに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚に死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、さま恐ろしげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬りて、夜な夜な天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「其の昔蒲生

岌々

咆哮  
噴薄激盪

急湍

蒲生飛驒守氏郷  
會津城主、文祿四年(三三)至歿、年四十。

粼々  
翠巒

清福自在

靄然  
恍然

飛驒守氏郷此の處に野立せしことあるに因りて、野立石とは申す。」と車夫のいふ。再び車に乗りて急ぐ。甘湯澤、小太郎ヶ淵など思ひやりつゝ、早くも畑下戸の里に著きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて、箒川の緩く廻れる磧に臨めり。

俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に満ち、袖の澤を落ち來る流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたり、吉井瀧といふ。東北は山又山を重ねて、一望のうち丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮む。げに又有るまじき清福自在の別境なり。

我は此の繪を見る如き清穩の風景にあひて、彼の途上險しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び、肉銷して、理むる方なく搔亂されし胸の中は、靄然として頓に和らぎ、恍然として總て忘れ

痼疾  
齒牙に掛けず

たり。誠に好くこそ、我は來つれ。胡ぞ來るの甚だ遅かりし。山の麗しと謂ふも、壤の堆きのみ、川のどけしと謂ふも、水の逝くに過ぎざるのみ、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも掛けず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚かのものなれや。見よ、見よ、木の緑も、浮べる雲も、秀づる峯も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の鳴く音も、空の色も、皆自ら憂世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と軽く、心は水と淡し。

性來多く山水の美に親しまざりし我は、殊に心往く所を知らざるばかりに愛で悦びて、内には入らで、始より瀧に向へる欄干に倚りて、偶、人中を迷ひたりし子の母親にも遇ひけんやうに、少時はその傍を離れ得ざるなりき。

(紅葉全集)

佐々醒雪

名は政一、京都市の人、國文學者、文學博士、大正六年歿、年四十六。  
エマーソン  
アメリカ合衆國の詩人、哲學者。(西曆一八〇三—一八八二)

煥發  
神餒

### 八 讀書の選擇

佐々醒雪

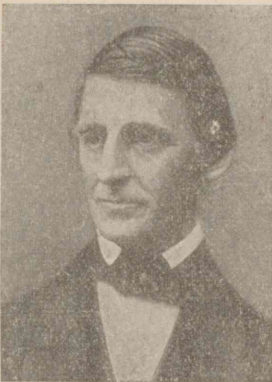
エマーソンいはく、書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費することなかれ」と。かの新聞雜誌と、拙劣なる小説とのみを愛讀するものは、エマーソンのいへる、劣等なる群書に記憶力を徒費するものなり。否彼等にして、かゝる劣等なる書籍の耽讀に歲月を涉りて、毫も良好なる書籍に興味を覺むることを勉めずんば、それは實に時間と記憶力との徒費のみにあらじ。かゝる讀書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、人をして神餒アガニチヤ氣スピリット阻みて、頹然として生氣なきに至らしむべし。

これを覺醒せんとするには、いかによすべき。エマーソンまた教へて曰く、讀書の最良法は、かの時間と紙とによりて製作せら

天然を讀む

審美

れたるものを措いて直ちに天然を讀むにあり」と。然り、誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄てて、名山大川の間に直ちに秀麗なる天然の文學に接せよ。親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは、汝が趣味を覺醒せしむることを得んか。



偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところは、天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も名山大川の間に逍遙するに似たり。されば、善良なる讀書は、よく眠れる趣味を警醒し、よくこれを啓發し、助長し、清新なる思想、靈妙なる筆力を涵養するものなりとせば、予は目下の讀書界を警醒し、指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜ

警醒

親炙

んとす。

苟くも書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを選ぶべきこと勿論なり。されども、最も優等なる書即ち第一流の書は、天下そも、幾何がある。今單に日本の文學書についていはば、萬葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強ひて二三を數ふるを得んも、一國の文學界の讀書をこの僅少なる書冊に限らんことは、殆どなし得べきにあらじ。否か、くの如きは實に予等が偏狹固陋として忌むところなり。

今この偏狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に専らなることを得んとせば、まさにいかにすべきか。かのエマーソンは、實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。まづ曰く、「一年を経ざる著作は讀むことなかれ」と。蓋し一年を経てなほ社會に忘れざるものは、或は多少の趣味あるもの

源語  
源氏物語の略、紫式部の著。  
近松  
近松門左衛門、江戸時代の劇作家。

淘汰

ならん。一年をだに經ずして、反故として投棄せらるゝものは、恐らくは一讀の價値なきものならん。歲月の淘汰を待たずして、徒らに争うて新版物を讀まんは、徒勞と時間とを賭して文學通の虛名を博し得んのみ。

蟻集

又曰く、有名ならぬものは讀むことなかれ」と。こは徒らに所謂珍本に蟻集することなからんことを教ふるなり。そもく名聲とは、多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の識者の鑑賞に反して、ある機會のために纔かに散佚を免れたる如き、價値の比較的乏しき古書を殊更に熟讀せんは、殆どこれ痴に類せずや。さるいかゞはしき勞力を費さんよりは、先づ有名なものを讀み盡せ。予等の眼前には、半生を讀書に費すとも、なほ熟讀玩味し盡す能はざるべき許多の有名なる著作あるにあらずや。

散佚

許多

ヒル

アメリカ合衆國、  
ハーバート大學教  
授。

推敲

又曰く、嗜好に適せざるものは讀むことなかれ」と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面に於ても我等の知るところなれども、前述の二條件の適合したる範圍に於て、その嗜好するところを求めば、蓋し大過なきを得んか。ヒルは更にこの條件を敷衍して曰く、再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ」と。試みに思へ、現時の讀書界がよく熟讀玩味したる新出版物、そもいくばくかある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて沒趣味の中に投ぜんとす。歎ぜざるべけんや。

故におもへらく、以上の三則は讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。

(朝衣評釋)

九九郎判官

一 太刀取り

辨慶思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は名馬千匹、鎧千領、松浦の大夫は胡籬千腰、弓千張。かやうに重寶を揃へて持つに、いで我は夜に入つて京中に佇みて、人の佩きたる太刀千振取つて、我が重寶にせん。と思ひ、夜な夜な人の太刀を奪ひ取る。しばしこそありけれ、當時洛中に長一丈ばかりある天狗法師のありきて、人の太刀を取る。とぞ申しける。

かくて、今年も暮れ、次の年の五月の末、六月の初までに、九百九十九腰こそ取つたりけれ。六月十七日、五條の天神に参りて、夜と共に祈念申しけるは、今夜の御利生に、よからん太刀を與へて、たび給へ。と祈念し、夜も更けぬれば、天神の御前を出て、南へむか

秀衡  
鎮守府將軍藤原基衡の子、義經を衣川に奉ず、文治三年八箇之歿、年八十餘。

松浦の大夫  
渡邊綱のこと、源頼光の四天王の一人、萬壽元年二六、四歿、年七十二。ありきて

坊主法師

こそいけれ

御利生

たび給へ

築土

法師やらん

さしくむ

直垂



取らんず

ひて行く行く人の家の築土の際に佇みて、天神へ参る人の中に、

良き太刀持ちたる人をぞ待ちあたる。

曉方になりて堀河を下りに行きければ、面白き笛の音こそ聞

えけれ。辨慶これを聞

きて、面白やさ夜ふけて

天神へ参る人の吹く笛

は法師やらん男やらん

よからん太刀を持ちた

らば取らんと思ひて、笛

の音の近づきければ、さ

しくみ見て見れば、未だ若き人の、白き直垂に、胸板を白くしたる

腹巻に、金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶これを

見て、あはれ太刀や、何ともあれ、取らんずるもの。と思ひて、待つ



(筆笠破) 慶辨坊藏武

直垂

御曹司

かゝる

左右なく

をこの者

見參

こそ覚えね

けなけ

みずやへのせ武く

ところにて、御曹司は木の下にけしからぬ法師の太刀わきばさみ  
 て立ちたるを見給ひて、彼奴は只ものならず、此の比都に人の太  
 刀を奪ひ取る者はきやつにてあるよと思はれて、少しもひるま  
 ずかゝり給ふ。辨慶現れ出て申しけるは、只今しづまりて敵を  
 待つところにて、けしからぬ人の物の具して通り給ふこそ怪しく  
 存じ候へ。左右なくこそ通すまじけれ。然らずば其の太刀  
 こなたへ賜ひて通られ候へ。と申しければ、御曹司これを聞き給  
 ひて、此の程さるをこの者ありとは聞きおよびたり。左右なく  
 えこそ取らすまじけれ。ほしくばよりて取れ。とぞ仰せられけ  
 る。さては見參に參らん。とて、太刀を抜いて飛んでかゝる。御  
 曹司も小太刀を抜いて、築土のもとに走り寄り給ふ。武藏坊こ  
 れを見て、鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覚えね。と  
 て、もつて開いて丁と打つ。御曹司、こはけなげ者かな。とて、電の

狼藉

つらげに  
念なく  
御邊

如くに弓手の脇へつと入り給へば、うち開く太刀にて、築土の腹  
 に切先うち立て、抜かんとしける隙に、御曹司走り寄りて、弓手の  
 足を差出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀  
 をからりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうちに、九尺ば  
 かりありける築土にゆらりと跳びあがり給ふ。  
 御曹司、これより後にかゝる狼藉すな。さるをこの者ありと、  
 かねて聞きつるぞ。太刀も取りて行かんと思へども、ほしさに  
 取りたりと思はんずる程に、取らするぞ。とて、築土のおほひに押  
 しあてて、踏みゆがめてぞ投げかけ給ふ。辨慶太刀取つて押直  
 し、御曹司の方をつらげに見やりて、念なく御邊はせられて候も  
 のかな。常に此の邊におはする人に見るぞ。今宵こそ仕損ず  
 とも、これより後に於ては心ゆるすまじき物を。とつぶやきてぞ  
 行きける。

二 浮島が原の對面

九郎御曹司浮島が原に著き給ひ、兵衛佐殿の前、三町ばかり引退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「こゝに白旗、白印にて、清げなる武者五六十騎ばかり見えたるは誰なるらん、おぼつかなし。」信濃の人々は木曾に從ひて止りぬ。甲斐の殿原は二陣なり。い

浮島が原  
静岡縣(駿河國)駿  
東郡愛鷹山の裾  
野。  
兵衛佐殿  
源賴朝。



(筆笠破) 經義源

かなる人ぞ。假名、實名を尋ねて參れ。」とて、堀彌太郎を御使にて遣され、家の子郎等あまた引具して參る。間を隔てて、彌太郎一

木曾  
木曾義仲。  
甲斐の殿原  
見・武田・小笠原等  
あり。

尋常  
猪頸に著る

謀叛

色代

騎進み出で申しけるは、「これに白印にておはしまし候ふは、誰人にてわたらせ給ひ候ふぞ。假名、實名を確に承り候へ」と、鎌倉殿の仰にて候。と申しければ、其の中に二十四五許りなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧の、裾金物打ちたるを著、白星の五枚兜に、鍬形打ちて猪頸に著、天中黒の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿も知ろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日につぎて馳せ參じて候。見參に入れて給ひ候へ」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてましましけりと、馬より跳んで下り、御曹司の乳母子、佐藤三郎を呼出して、色代あり。彌太郎一町許り馬を曳かせけり。かくて佐殿の御前に參り、此の由を申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしける

あ官  
いこまの便  
けい

頭の殿  
左馬頭源義朝

が、今度は殊の外に嬉しげにて、さらばこれへおはしまし候へ。  
見參せん。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司に此の由を申す。  
御曹司も大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐藤三郎同四郎伊勢三  
郎これら三騎召連れてぞ參らるゝ。佐殿御陣と申すは、大幕百  
八十町引きたりければ、其の内は、八箇國の大名、小名並みゐたり。  
各、敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一帖敷きたれども、  
佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司は兜を脱ぎて、童に持たせ、  
弓取直し、幕のきはに畏まつてぞおはしける。其の時、佐殿敷皮  
をさり、我が身は疊にぞ直られける。「それへそれへ。」とぞ仰せら  
るゝ。御曹司しばらく辭退して、敷皮にぞ直られける。佐殿御  
曹司をつくゝと御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司も  
其のいろは知らねども、共に涙にぞ咽び給ふ。互に心のゆく程  
泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿におくれ奉りて、其の後

池の尼

平清盛の繼母。

伊豆の配所

蛭が小島。

伊東

伊東祐親。

北條

北條時政。

よわけ  
まほる

存する間

御行方を承り候はず。幼少にておはし候時、見奉りしばかりな  
り。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北  
條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の  
由は、かすかに承り候ひしかども、おとづれだにも申さず候。兄  
弟ありと思召し忘れ候はで、取敢へず御上り候事申し盡し難く  
悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企て候  
へ。八箇國の人々を初めとして候へども、皆他人なれば、身の  
大事を申しあはする人もなし。皆平家に相従ひたる人々なれ  
ば、頼朝がよわけをまほり給ふらんと思へば、夜も夜もすがら、平  
家の事のみ思ひ、又或時は、平家の討手上せばやと思へども、身は  
一人なり、頼朝自身進み候はば、東國おぼつかなし。代官を上せ  
んとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家  
と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存する間、それも叶ひ



風

八幡殿

源義家、嘉承元年  
(七六〇)歿、年六十八  
むなうの城

宮城縣(陸前國)桃  
生郡にありしとい  
ふ、所在不詳。

厨川

岩手縣(陸中國)岩  
手郡にあり、前九  
年役の古戰場。

感應

刑部丞

源義光、義家の弟、  
大治二年(七七一)歿、  
年未詳。

難し。今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の甦らせ給ひた  
るやうにこそ思ひ候へ。我等が祖先八幡殿の後三年の合戦に  
むなうの城を攻められしに、多勢皆滅されて、無勢になつて、厨川  
のはたにおし下りて、幣帛捧げて王城を伏拜み、南無八幡大菩薩  
御おほえをあらためず、今度の壽命を助けて本意を遂げさせて  
給べ。と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にや有り  
けん都におはする御弟刑部丞は、俄に内裏を紛れ出て、奥州の覺  
束なきとて、二百騎にて下られけり。路次にて勢うちくははり、  
三千餘騎にて厨川に馳せきて、八幡殿と一つになりて、遂に奥州  
を從へ給ひけり。その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせた  
る心も、いかでか是にまさるべき。今日より後は、魚と水との如  
くに、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤りを休めん。と宣ひもあへず、  
涙を流し給ひけり。御曹司は、とかくの返事もなくして、袂をぞ

絞られける。これを見て、大名小名、互の心の中推測られて、皆袖  
をぞ濡しける。

暫くありて、御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目にか  
かりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候  
ひしが、七歳の時鞍馬へ參り、十六までかたの如く學問を仕り、さ  
ては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り候間、奥州に  
下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛の由承りて取敢へず  
馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り  
候心地してこそ候へ。命をば故頭の殿に參らせ候。身をば、君  
に參らす上は、いかゞ仰に従ひ參らせでは候べき。と申しも敢  
へず、又涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそ此の御曹司を  
大將にて上らせ給ひけれ。

山科  
京都市東山區に在  
り。

鞍馬

京都府(山城國)愛  
宕郡鞍馬山鞍馬  
寺。

義經記  
八卷、室町時代に  
成りし戦記物語、  
主として義經の事  
蹟を描く、作者未  
詳。

(義經記)

厨川白村  
名は辰夫、英文學  
者、文學博士、大  
正十二年歿、年四  
十四。

一〇 小泉先生の舊居を訪ふ 厨川白村

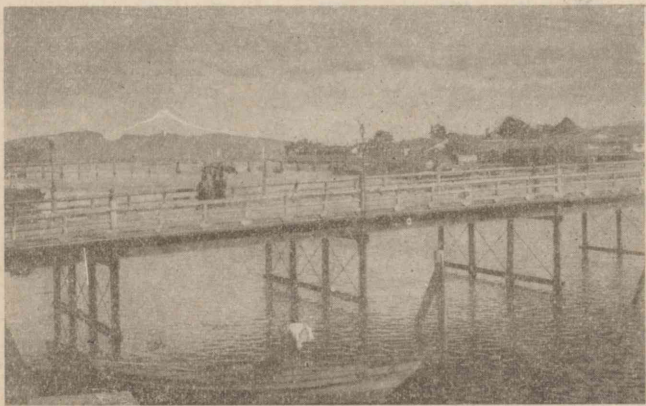
松江名所はかず／＼あれど、千鳥お城に嫁が島。  
花は城山紅葉は春日、月は愛宕に津田の雪。  
(安來節)

山陰の古都松江は、今もなほ出雲神話を想はせる夢の都である。宍道湖畔の水郷に、土地の人は茶ばかり飲んで、うつらうつらと夢の國を辿つてゐる。臨水亭といふ旅館の欄に倚つて、松江大橋嫁が島、どこを眺めて見ても、思ひ切つてのんきなものである。すべてがどんよりした、沈靜な薄暮の氣に包まれて、いま光明の國から消去らうとする影を見るやうだ。

そんな事を考へながら、ぼんやりしてゐる私を、突如として驚かしたものがあつた。まるで大地の底から今飛出した怪獸が、吼えるにも似た凄まじい聲が鼓膜を突く。叫ぶが如く、また唸る

が如く、とても形容も何もしやうのない奇怪至極な聲である。

松江大橋



しばらく、あつけに取られて聞いてゐた私は、聲の止むのを待つて、あれは何ですかと傍人に聞いた。午砲の代りに午後七時を報ずる警笛ださうである。途方もない事をやつたものかな。これもたしかに松江名物の一つであらうか。

どこでも普通は正午にする事を、夜の七時にやつて平氣である松江は、さすがに夢と影との都だ。時間と共に時代をも超脱したローマンズの郷土である。一體、どこからどうすると、あんな奇怪千萬な

ローマンズ

民衆藝術

ラフカヂオヘル  
元英國の人、我が國に歸化し、名を小泉八雲と改む、明治二十三年來朝、同三十七年歿、年五十五。

聲が出るのだと聞くと、何でも市役所とか電燈會社とかの仕業ださうだ。成程二十世紀だ、松江にもそんなものがあるのかなと、私は始めて夢を破られた。松江の人たちは日に一度づつ、あの怪物の聲によつて、夢の都の夢の生活から、無理やりに現代に引戻されてゐるのであらう。しかも引戻すその聲からして既に、素盞鳴尊の神話に出る八岐の大蛇の呻きのやうなだから、面白いと思つた。見れば松江大橋にも電燈がともつてゐた。夢と神話の出雲の國の郷土から生れた民衆藝術である安來節に、「松江名所は數々あれど、と數へた千鳥お城よりも、嫁が島よりも、更に遙かに意義の深い名所が、ほかに一つある。それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人が殆ど顧みない、否、松江の人すら多くは知らない名所だ。言ふまでもなく、それは小泉八雲先生——ラフカヂオヘルン氏の舊居である。

日本を見物に来る西洋人のうちには、日本人の全く知らない名所を、やつとの事で尋ね當てて、あの不愉快な山陰線の汽車に乗つて見に行く人が、近頃は殊に多い。それどころか、はるく太平洋のかなたから、先生の遺跡を訪はんがためにのみ、日本に來遊する外人もあるのだ。現にこのたび米國で先生の全集刊行の擧あるに際して、松江時代の舊居の寫眞を撮らんがため、かの國からわざ／＼出かけて來た人さへあるではないか。

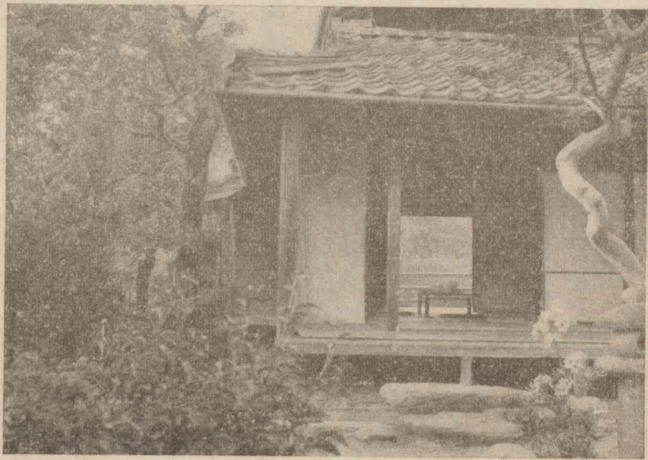
午後の七時になつてから、あんな怪獸の吼えるが如き音響を工夫してゐるあひだに、松江の人たちも少しはヘルン先生の偉業を考へて見たらいゝだらう。せめて小泉先生の舊居を旅の人に語り得るだけに、注意してゐる位の事はあつて欲しい。

城址の美しい青葉を照らす午後の日ざしが傾く頃、靜かな濠端の或家の門に私の車はとまつた。それは如何にも、さむらひ

凋落

封建時代

の敗殘凋落のあとを想はせるやうな家中屋敷の一つであつた。古びた門構といひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代そのままのものであつた。正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や、庭石も、かつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に縁側に近いところにある百日紅だの、珍しい老木の、大木蓮だのは、先生の殊のほかなる愛樹であつたと聞くさへ懐かしい。樹木の精ハマドライアットの神話を語つた古代の



小泉八雲の舊宅

希臘人のやうに、先生もまた草木に宿る生命に、強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或寺院の老木を一握の黄金に代へて惜しげもなく伐倒さうとした俗僧を見て、ひどく怒られたといふ話がある。先生はその深い愛の生活、強大な感情生活のうちに、自然と人生と超自然のすべてを抱擁してをられた人であつた。

その次の間の十疊は、先生が新婚の楽しい日を送られた茶の間であつた。洋風の椅子など用ゐないで座蒲團に坐り、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奥さんや來客と打解けて語られたのはこの室であつた。この家の持主であり、現在の主人である根岸さんは、私をこの部屋に通して色々の話をせられた。日本に於ける先生の舊居の地としては、この松江の他に、熊本時代のもあれば、また現在未亡人の住まつてをられる東京の大

韜晦

ロバート・トリル・イス  
スチブソン  
英國の詩人、小説  
家。(西曆一八五〇—一八  
九四)

久保の邸もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化せられた先生にとつて特殊の意味がある。天外萬里、漂浪の孤客として、その頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い遠い日本の、しかもまた山陰の片ほとり、夢と影との神話の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を娶られた。英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如としてこの地からあの最大の名著「日本警見録」二卷を公にせられたのだ。「作者は果して何處にある如何なる人ぞ。」と、かなたの文壇の驚異となり、はてはラフカディオ・ヘルンその人の實在をすらも疑はれた時があつた。先生と同じく近世散文の巨匠であるロバート・トリル・イス・スチブソンも、故國蘇格蘭を出てからは足跡天下にあまねく、米國の桑港で結婚してのち太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終ふるまで、後の研究者はその足跡を辿るのに没頭してゐる。わたくしは松江に於

終焉の地

ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるスチブソン終焉の地の如くに、今後は益々多くの文學巡禮者の驚歎と好奇の念を惹くことであらうと思ふ。

先生みづからに於ても、その楽しいゆかしい思ひ出と愛惜とが、特に松江のこの家から離れなかつたものと見えて、後年、熊本から東京帝國大學へ轉任せられる途中、まだ全く山陰地方に汽車の便の無い頃に、わざ／＼廻り道をしてこの第二の故郷を訪はれ、わが家に歸つた。と言つて喜ばれたさうである。この茶の間に接した北向きの六疊の一室が先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な古びた、いかにも士族屋敷らしい空氣に満ちた部屋である。障子を開けて縁側に出ると、その庭には小さな池があつて、まんなかに一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は、以前しばらく模様變へしてあつたのを、近ごろ根岸さんが

舊態

また先生在住の頃の舊態昔のまがたに復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指しながら、根岸さんは色々の話をせられた。「この池の中には随分澤山蛙がゐるたさうですが、それを捕らうとて、藏の後の方から蛇だの鼯だの出て来たもんださうです。『時蛙が捕られると、あはれな悲鳴あはれななきを擧げるので、その時は先生の一家が皆飛出して来て、大騒ぎをした。』と奥さんが話されました。それで、先生は時々食べ残りの肉を皿に入れて石段に置き、蛇や鼯に與へられました。『私が御馳走をしてやるから、蛙を捕る事だけはよしてくれよ。』と先生はいつも言はれたさうです。」

さういふ事を根岸さんは話された。裏の籬かきを越えて、右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩トビぼつぼ、杜鵑トウキョウの聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に閉籠つて、冥想もし、讀書もし、創作もせられたのであつた。また正面はるか向うの方に、樹間

冥想

山中鹿之助  
名は幸盛、尼子氏  
の忠臣、天正六年  
(三三〇) 歿、年三十  
四。

タウヒニッツ  
獨逸の大出版業  
者。

家づと

を洩れて見える山が、山中鹿之助の城址ださうである。ゆつくり話を聞いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に著くと、もう人の顔がぼんやりする程にほの暗かつた。私はこの夢の國に来て、夢の家をたづね得た事を喜びながら、暫くして辭し去つた。門前の濠の水は深く濁つて、青葉のゆふべの影を宿してゐた。

翌日わたくしは京に歸る前、記念のために松江の本屋で獨逸のタウヒニッツ廉價版の「たなばた物語」一部を求めた。これは先生が雑誌などに載せられただけで、遂に未定稿のまま、まだ一冊の本には纏めずして世を去られた數篇を、歿後に出版したものである。松江名物の大きなあはび貝を五つと、先生のこの遺著とを家づとにして、わたくしは夢と影との松江を去つた。

—(厨川白村集)—

# 一一 柔術

小泉 八雲

門外漢

柔術は昔の日本武士の護身の嗜みで、武器を持たずに戦ふ術である。門外漢には一寸角力のやうにも見える。試みに柔術の道場へ行つて見るがよい、體の撓やかな青年が二人づつ一組になつて、十人、十二人、素手素足で畳の上に揉合つてゐる周圍に、一群の學生が固唾を呑んで控へてゐるのが目に入るであらう。彼等は靜まりかへつて、誰一人、口を利く者がなく、喝采をする者もない。

此の靜肅の態度が柔術の道場の大切な規約の一つで、此處に入ると、水を打つたやうな光景が先づ著しく人の心を惹くのである。

柔術は遊戯ではない。眞劍になると、西洋の拳闘家などが一

臆測

自衛

電光石火

道心

寸見て臆測するよりも遙かに危険である。此處にゐる教師は、見たところ弱さうだが、普通の西洋の拳闘家を倒すくらゐは何でもない。柔術は人に見せる技術ではなくして、自衛の術であり、また一種の戰闘術である。此の術の心得のない者が柔術家にかゝつたら、手もなく投げられてしまふ。まづ一種の秘術で、外部からは見えぬやうに腕を抜く、關節を外す、腱を弛める、骨を折る。彼は力士以上である、否寧ろ一種の解剖學者である。彼は電光石火的に人を殺す術を知つてゐる。だが、これには非常に固い誓約があつて、滅多に其の手を出されぬことになつてゐる。此の術は特別傳授で、品行の正しい道心の堅固な人でなければ授けられぬ。

こゝに忘れてならぬことは、柔術家は決して自分の力にたよらぬので、非常な場合の外は自分の力を使はぬといふことであ

る。それでは何を使ふかといふと、唯敵の力を使ふ。敵を倒すに敵の力を用ゐる。だから敵の力が大いなければ大いなる程、敵には不利で、我には利である。余が或柔術の大家に會つた時に、非常に強さうな一人の青年が居た。余はこれが定めし弟子の中で一番えらいのであらうと思つて、聞いて見ると大違ひ、これが一番教へるに骨が折れると云つたので、驚いて「何故か」と聞くと、「自分の腕力をあてにするからだ」といふ答であつた。蓋し、柔術とは、柔によつて剛を制するといふ意味なのである。

とにかく柔術の奇特な點は、其の達人の目ざましい手練、其のものにのみあるのではなくして、實に此の術の中に含まれて居る一種の無類な東洋思想にあるのである。西洋人の頭腦では、此のやうな不思議な技は考へ出せぬ。力を以て力に對せず、ただ攻めて來る敵の力を利用して、敵の力で敵を倒し、敵の働で敵

## 奇特

## 直線的

## 曲線的

## 德育

を制するといふ離れ業は、決して西洋人の工夫の中から出て來ることではない。西洋の思想は直線的に働くが、東洋のは曲線的である。柔術は單に防禦の學問ではなくして、一種の哲學である、一種の經濟學である、否々一種の修身法といつてもよい。これは空言ではない、柔術教育の大部分は、事實、純然たる德育である。

日本人は萬事柔術の寸法で行く。彼等はフランス、ドイツの長所を採つて軍制を定めた。英佛の海軍を模範として立派な海軍を興した。フランス人の監督の下に造船所を營み、支那朝鮮、マニラ、メキシコ、印度、其の他の地方へ其の産物を輸出するために、多くの汽船を備へつけた。軍事上、商業上の目的で五千餘哩の鐵道を布いた。英米の力を借りて、郵便電信の制度を立てた。其の燈臺は兩半球の海岸の中で一番明るいと言はれる。



信號の運用も合衆國に劣らぬ手練を示してゐる。電話や電燈もアメリカから持つて來た。學校の制度は獨佛米を參照して立派に自家の組織を立てた。始めて鑛山鐵道其の他一般の工場に機械を据附けた當時は、盛に外國人を傭つたが、今ではもうそれを廢めにかゝつてゐる。

一言にして蔽へば、日本人は西洋の工業や應用科學や經濟上法律上諸の經驗の中から、使へさうなものを選び取りに取つて使つてゐるのである。使ふといつても、決して摸倣的には採らずして、其の力を伸ばす足になるやうなものだけを採り上げて居るのである。日本人は、最早あらゆる外國の學術を棄てても殆ど困らぬと云ふ所まで行つた。それらをばもう悉皆自分のものにして、しかと手の中に握つて居る。しかし衣食住と宗教とだけは西洋のを採らなかつた。其の譯は外ではない。それ

らのもの、殊に宗教を取入れると、却つて其の力を殺ぐやうなことになるからである。其の鐵道と汽船と電信と電話と、郵便事務と運送事業と、鋼鐵砲と旋條銃と、大學校と専門學校と、これら新式の事物が續々興つたに拘らず、日本は今なほ依然として千年の舊態を存してゐる。彼は、自己を持って、極度まで敵の力を利用する道を心得てゐる。彼は比類なき自己防禦の組織、驚くべき國民固有の柔術によつて、自己を保護しつゝあるのである。

—(戸澤正保譯「東の國から」)—

戸澤正保  
茨城縣の人、英文  
學者、東京外國語  
學校長。

人之生也柔弱<sup>ニルキヤ</sup> 其死也堅強<sup>スルキヤ</sup> 萬物草木之生也柔脆<sup>ニルキヤ</sup> 其死也枯槁<sup>ナリ</sup> 故堅強者死之徒<sup>ニシテ</sup> 柔弱者生之徒<sup>ナリ</sup> 是以兵強則不勝<sup>キトキハチ</sup>

柔能制剛<sup>クハク</sup> 弱能制強<sup>クハク</sup> 柔者德也<sup>トク</sup> 強者賊也<sup>トク</sup> (老子) (三略)

大佛次郎

本名は野尻清彦、  
横浜市の人、小説  
家、明治三十年生。

大石内藏助

良雄、赤穂四十七  
義士の領袖、元祿  
十六年(三三)二月  
四日死を賜ふ、年  
四十五。

主税

内藏助の嫡子、良  
金、父と同日死を  
賜ふ、年十六。

## 一二 内藏助と主税

大佛次郎

大石内藏助は火箸を取つて火をかきおこしながら寂しく更  
けた秋の聲に聞入つた。軒端の風鈴が、時折雨戸の外にかすか  
な音をたてる。これと、縁の下の蟲の音が、この一夜の静けさに  
深みを加へてゐるのである。

「主税は何をしてゐるのだらう。」

ふと、内藏助はかう考へた。

部屋にゐた主税は、父親がのつそりとはひつて來たのを見た。

「どうだ。」

と内藏助は言つて、坐つた。

主税は幾らかはにかんだやうに微笑して、書きかけてゐた手  
紙を伏せた。

「もう寝たがい。」

内藏助は胸にうかんで來た言葉を、そのまゝ口にのぼせなが  
ら、ひよつとすると、主税の書いてゐた手紙が、實家へ歸つてゐる  
母親や弟達に宛てたものではないかと考へた。

内藏助は、それを聞いて見ることをわざと避けた。何かしら、  
わが子に詫びなくてはいけないことがあるやうに考へられた。  
「さびしくはないか。」

父親は暫くして慈愛をこめていつた。始めてわが子の顔を  
まともに見た。

「いゝえ。」

主税は、やはりはにかんだやうに、かう答へてそつと身を動か  
した。

父親は、「母や弟達に會ひたくないか。」といふ言葉を、咽喉まであ

ふれさせて、手の届くところに重ねてあつた本を黙つて膝の上に取上げた。

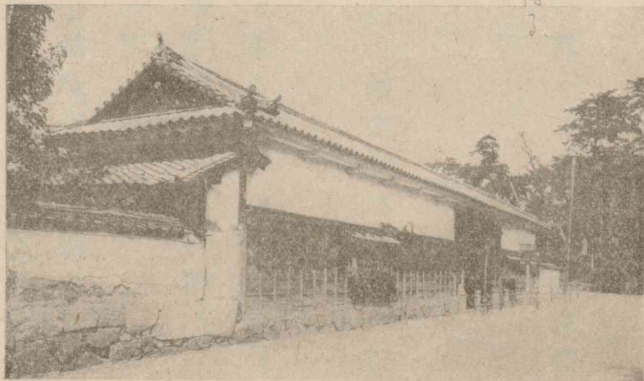
不審紙

論語

二十篇、孔子とその弟子との問答及び孔子の實行を記録せしもの。

あどけなし

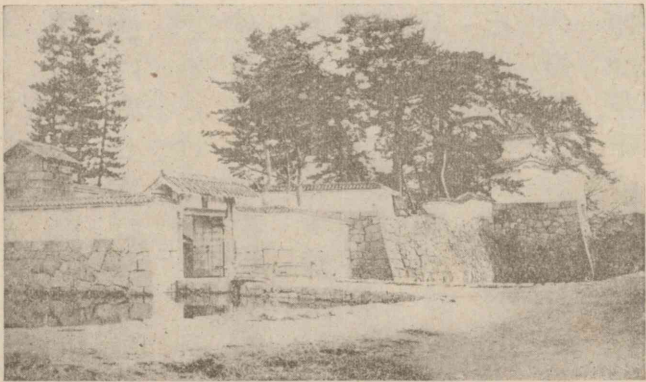
これをひろげて見て、それが子供らしい努力の跡を不審紙や點で示してある論語の本であることを認めて、父親は、夜毎にこの本を二人の間に置いて、講釋してやつた、遠くもない過去のことを思ひうかべないではゐられなかつた。その時分から見ると、この子は何と大人びて來たことであらう。全くあどけない子供であつたが……この一二年の間に大人びて來たことは驚くべきほどだつた。おれのこの齡頃には、たしかまだ、



大石良雄の舊宅

目射

不態



犬や小鳥が遊び相手で、いくさごつこが日課になつてゐたのだつた。  
黙つてまだ父親と一緒にゐることが、楽しい主税を、内藏助は感慨深く、優しい目射で、くるんで眺めるのだつた。何か言つてからかはうとしてゐるやうな微笑が、自然と口元を動かして來る。  
この齡頃では、ひと月が他の齡の一年にもあたるのではないか。いや、しかし……軀よりも心持であつた。軀は大きくなつたといふだけで、まだ如何にも子供っぽい不態なところを残してゐるが、近頃の心持の

大人びたことはどうだらう。それも、あの**大變**があつてからである。復讐のことが、行く手に定められてからのことである。子供は子供なりに、新鮮でゐて傷つき易い心の皮膚に、却つて鋭敏に感じたのだな。

あどけなかつた目が、大人のやうに濁ることはなしに、急に深い色を湛へるやうになつた。悲しげに曇つてゐることもまゝある。決して自分からは聞かせはしないが、同志の足並の不揃なこと、急進、穩和兩黨の軋轢、母や弟達と別れねばならぬ事情が、ものの影が池に映るやうに、この子の心の水面に何かを投げずにはゐなかつたのだ。

知らなかつたのではない、自分は氣がついてゐた……内藏助は、非難に答へるもののやうに、躍起とから思ひながら、いぢらしさに慄へて、次第にうるんで來る眼を、淡い悔恨に似たものに

躍起と

軋轢

くるんで、見詰めてゐるのだつた。その心持は、やがて、黙つて微笑してゐるだけの主税を眺めてゐるうちに、これまでに育つた子を殺すのだ、と思ふ心持に變つた。

この子は何のために漢籍を讀み、何のために修業に精進するのか。その苦勞をしても、死は間近いところまで來てゐる。この若樹のやうに強健に立派に育つて來た肉體も、また正しからうと努めてゐるみづ／＼しい精一杯の心持も、死神の水のやうな手に握られて、瞬間にそのままに終るのではないか。この子は、そのことを考へてゐないのか。大人はいゝ。武士といふものの資格が、靜かに死に就くだけの覺悟を養ふことにあると見てもよいし、風俗も習慣もその修養を助長するやうに出來てゐるのである。しかし子供は、それとは別ではなからうか。まだそれだけの覺悟を作る時間もあるまいに、この落著

き加減は、恐らく死といふことを知らないから來てゐるのではなからうか。

内藏助は言つた。

「毎日たいくつはしないか。」

「いゝえ。」

と主税は答へた。

「することが澤山ございますから。」

「何がそんなにある。」

「劍術……」

「それから。」

「主税は父上のお供をして參るまでに、出来るだけ澤山御本を讀んで置きたいのでございます。それから、ほかにもつとすることが澤山あるやうな氣がしてをります。」

「……………」

さうだ、主税は忙がしかつた。人が五十年かゝつてやることを、残つた僅かの時日の間にして了はなければならぬ。父親はつくづくとかう考へ、胸はいぢらしさに烈しく動いた。

主税は、やはり死ぬことなど別に氣にもとめてゐないのかも知れない。しかし、それに拘らず近づいて來てゐる死が、たとひ間接にでも影をさして、この生活をあわたゞしくしてゐることかと思ふと、父親は胸のなかで泣かずにはゐられないのだつた。

—(赤浪穂士)—

大高源吾

本名は忠雄、赤穂四十七士の一、通稱源吾、俳諧をよくし、子葉と號す、元祿十六年(三十三)死を賜ふ、年三十二。

殿様

淺野長矩、播磨國(兵庫縣)赤穂藩主、元祿十四年(三十一)死を賜ふ、年三十六。

愍

無念

一三 母に奉る

大高源吾

一、私事此の度江戸へ下り申し候存念、豫ても御物語り申上げ候通り、一筋に殿様御憤りを祭し奉り、御家の御恥辱を雪ぎ申したき一筋にて御座候。さしての御懇意にも遊ばし下されざりし人並の私儀にて御座候へば、此の節大抵に忠をば存じながら候うて、そもじさま御存命の間は、御養育仕り候うても、世の誹あるまじき我等に候へども、愍に御側近き御奉公相務め、御尊顔を拜し奉りし朝暮の儀、今以て片時忘れ奉らず。大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き御家をも思召し放たれて、御鬱憤遂げられ候はんと思召し詰められ候御相手を討ち損じ、御生害遂げられ候段、御運の盡きられ候とは申し乍ら、無念至極、恐れ乍ら其の時の御心底推量り奉り候へば、骨髓に

不調法  
天下

上野介殿

吉良上野介義央、元祿十五年赤穂四十七士の爲に討たる。

大學様  
淺野長矩の弟、長廣。

徹して、一日片時安き心御座なく候。されども御短慮にて、時節と申し處と申し、一方ならぬ御不調法ゆゑ、天下の御憤り深く、御仕置に仰付けられ候御事に御座候へば、力及び申さぬ御事、全く天下を御恨み申上ぐべき様御座なく候故、御城は仔細なく差上げたる事に御座候。是天下へ對し奉り候うて憤りを存じ奉り申さぬ故にて御座候。併し殿様御亂心にも御座なく、上野介殿へ御意趣御座候由にて、御切付けなされたる事にて候へば、其の人はまさしく敵にて御座候。主人の命を捨てられたる程の御憤り御座候敵を、安穩に差置き申すべき様昔より唐土我が朝、共に武士の道にあらぬ事にて候故、早速敵の方へ打ちかけ申すべく候處、大學様御閉門にて候へば、御免なされ候時分、もしや殿様御跡少しにても仰付けられ候様にも罷り成り候はば、殿様こそ右の通りに候とも、御家は残り申

す事にて候。然れば我々は出家沙門となり、又は自害仕り候うても憤りは休め候はんと、此の節迄口をしき月日をも送り候處に、其の詮なく、安藝の國へ御出なされ候。閉門御赦と申すも名許りにて御座候。尤も年内過ぎ候はば、何卒御世に出でさせられ候事も御座あるべく候はんか。よしさ様御座候とも、此の節殿様御跡は絶え申したる事に御座候へば、此の上前後を見あはせ申すは臆病の仕業、武士の本意ならぬ事にて御座候。此の上にて天下へ御訴訟申上げ、何とぞ相手方へ御手當も下り、大學様にも世間廣く御取立て遊ばされ下され候様に、一命に掛けて御歎き申上げ、是非御取上げなく候はば、其の時相手方へ取懸け申すべき由、頻りに相談の衆も御座候。尤も一理御座候様子は候へども、中々さ様の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず候。其上御願ひ申上げ、御取上

徒黨

げ御座なく候につき、相手方へ取掛け申し候段、偏に天下を御恨み申上げ候に等しく御座候。然れば以ての外なる儀、大學様始め御一門の御方様までも、御爲宜しからぬ事にて候故、只一筋に殿様御憤りをはらし奉るより外の心御座なく候。一、段々右申す如く、武士の道を立て、御主の讎を報じ申すまでにて、全く天下に對し奉り御恨み申すにて御座なく候。然れどもいかなる思召御座候うて、天下へ御恨み申上げたるも同然とて、我々共の親妻子に御たゝり御座候とても、力及び申さず候。萬一さ様の事に成り候はば、豫て仰せられ候通り、上よりの御下知の通り、尋常に御覺悟なさるべく候。御早まり候うて、御身を我と御あやまちなされ候御事などくれゝ有るまじき御事にて候まゝ、必ず必ずさ様御心得なされたく候。彼是と御歎の色も見えさせられ候はば、如何許り氣の毒にて

冥利

幸右衛門

赤穂四十七士の  
一、小野寺秀富、大  
高源吾の弟、幸右  
衛門はその通稱。

九十郎

赤穂四十七士の  
一、岡野包秀、大  
高源吾の姉の子、  
九十郎はその通  
稱。

究竟

閻魔の金札

心も惹かれ候はんに、流石常々の御覺悟の程御座候うて思召し切り、却つて健氣なる御勸にも預り候事、抑今生の仕合、未來の喜び、何事か是に過ぎ申し候はんや。あつばれ、我々兄弟は侍の冥利に叶ひたる儀と、淺からぬ本望に存じ奉り候。さきにての首尾の程、御心に掛けさせらるまじく候。私三十一、幸右衛門二十七、九十郎二十三、何れも何れも究竟の者どもにて、たやすく本望を遂げ、亡君の御心をやすめ奉り、未來閻魔の金札の土産備へ申し候まゝ、御心安く思召し、只々御息災にて、何事も時節を御待ちなさるべく候。御齡もいかに御傾き、幾程有るまじき御身に、さぞ御心細く便りもあらぬ方に、乏しく月日を御渡り遊ばし候はんと存じ奉り候へば、いか許りか心うく候へども、其の段力及び申さず候。時に臨み候うては、主命に背き父母を肩にかけ、いかなる山の奥野の末にも隠れ、又主

法體

君の爲には父母の命をも失ひ申すを義と申すもの、止み難きためしにて候。これくの道理に暗からぬそもじ様におはしまし候へども、筆に任せ申残し候。九十郎母とお千代へもより、は仰せきかされ、必ず必ず愚かに悲しみ申さぬやうに、互に御力を添へさせられたく候。幸かな、御法體の御身に、て御座候へば、此の後愈、以て佛の御勤のみにて、うさもつらさも御まぎれましまし、未來の御事朝夕に御忘れなう、世も穩かに御座候はば、寺々にも節々御参り遊ばし下さるべく候。一つは御歩行御養生にもなり申すべく候。乳母にも諦め候様によく、仰せられ下さるべく候。かしこ。

元祿十五壬午年九月五日

大高源吾

母御人様

しん上（赤穂義人墓書）

（赤穂義人墓書）



東郷平八郎  
鹿兒島縣の人、元  
帥、海軍大將、侯  
爵、昭和九年歿、  
年八十八。

隆昌

保全

### 一四 聯合艦隊解散告別の辭

東郷平八郎

二十ヶ月の征戰既に往事と過ぎ、我が聯合艦隊は、今や其の隊務を結了して茲に解散する事となれり。然れども、我等海軍軍



東郷平八郎

人の責務は決して之が爲に輕減せるものにあらず。此の戰役の收果を永遠に全くし、尙益、國運の隆昌を扶持せんには、時の平戰を問はず、先づ外衛に立つべき海軍が、常に其の武力を海洋に保全し、一朝緩急に應ずるの覺悟あるを要す。而して武力なるものは艦船兵器等のみにあらずして、之を活用する無形の實力に在り。百發百中の一砲能く百發一中の敵砲百門に對抗し得るを悟らば、我等軍人



(筆折不村中)

戰海海本日

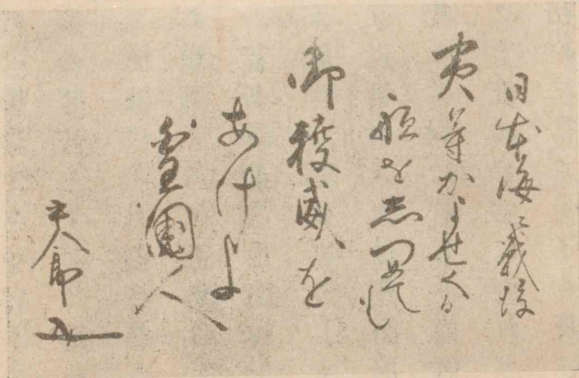
形而上

既往

日本海々戦後  
夷等かよせくる艦  
をしつめても御稜  
威をあげよ皇國人  
平八郎

Come you  
tell me  
the times

は主として武力を形而上精神の方面に求めざるべからず。近く我が海軍  
の勝利を得たる所以も天會至尊の靈徳に頼る所多しと雖も、抑ア亦



東郷平八郎筆蹟

平素の錬磨其の功を成し、果を戦役に  
結びたるものにして、若し既往を以て  
將來を推すときは、征戦息むと雖も安  
んじて休憩すべからざるものあるを  
覺ゆ。惟ふに武人の一生は連綿不斷  
の戦争にして、時の平戦に由り、其の責  
務に軽重あるの理無し。事有れば武  
力を發揮し、事無ければ之を修養し、終  
始一貫其の本分を盡さんのみ。過去  
の一年有半、彼の風濤と戦ひ、寒暑に抗  
し、屢頑敵と對して生死の間に出入せしこと、固より容易の業な

偷安

沙上の樓閣

らざりしも、觀ずればこれ亦長期の一大演習にして、之に参加し、幾多啓發するを得たる武人の幸福比するに物無し。豈之を征戰の勞苦とするに足らんや。苟くも武人にして治平に偷安せんか、兵備の外觀巍然たるも、宛も沙上の樓閣の如く暴風一過忽ち崩倒するに至らん。洵に戒むべきなり。

廢頽



觀覲

昔者神功皇后三韓を征服し給ひし以來、韓國は四百餘年間我が統理の下にありしも、一たび海軍の廢頽するや、忽ち之を失ひ、又近世に入り、徳川幕府治平に狂れて兵備を懈れば、擧國米艦數隻の應對に苦しみ、露艦亦千島樺太を覬覲するも、之と抗争すること能はざるに至れり。翻つて之を西史に見るに、十九世紀の初めに當り、ナイル及びトラファルガー等に勝ちたる英國海軍は、祖國を泰山の安きに置きたるのみならず、爾來後進相襲うて能く其の武力を保有し、世運の進歩に後れざりしかば、今に至る

殷鑑

千本

爲政

孜孜

庶幾

褫ふ

迄永く其の國利を擁護し、國權を伸張するを得たり。蓋し、此の如き古今東西の殷鑑は、爲政の然らしむるものありしと雖も、主として武人が治に居て亂を忘れざると、否とに基づける自然の結果たらざるは無し。我等戦後の軍人は深く此等の實例に鑑み、既有的の鍊磨に加ふるに、戦役の實驗を以てし、更に將來の進歩を圖りて、時勢の發展に後れざるを期せざるべからず。若しそれ、常に聖諭を奉體して、孜孜奮勵し、實力の滿を持して放つべき時節を待たば、庶幾くは以て永遠に護國の大任を全うすることを得ん。神明は唯平素の鍛鍊に力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授けると同時に、一勝に満足して治平に安んずる者より、直ちに之を褫ふ。古人曰く、勝つて兜の緒を締めよ。と。

明治三十八年十二月二十一日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

一五 おらが春

小林一茶

一 おらが春

小林一茶  
名は信之、信濃國  
(長野縣)の人、俳  
人、文政十年(一八  
八七)歿、年六十五。  
普甲寺  
京都府(丹後國)與  
謝郡大江山にあり  
し寺院。  
さゝめく



茶 一 株 小

昔、丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人あり  
けり。年の始は、世間は祝事をしてさゝめければ、我もせんとて、大  
晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手  
紙したゝめ渡して、あすの曉にしか  
じかせよと、きと言ひをしへて本堂  
に泊りにやりぬ。  
小法師は、元日の旦、いまだ隅々は  
小暗きに、初鶏の聲と同じく、がばと  
起きて、教の如く表門を丁々とたゞけば、内より「何處より」と問ふ  
時、西方彌陀佛より、年始の使僧に候。と答ふるよりはやく、上人は

丁々とたゞく

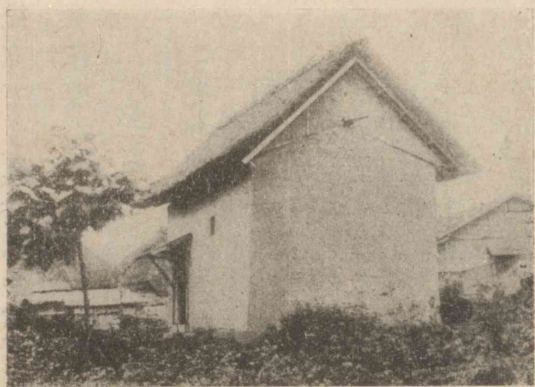
きと言ひをしふ

だしにて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座  
に請じて、きのふの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、

それ世界は衆苦充滿に候間、はやく  
我が國に來たるべし。聖衆出迎へ  
て待入り候。

と讀み終りて、おうくくと泣かれける  
とかや。

この上人、自ら企みこしらへたる悲  
しみに、自ら歎きつゝ、初春の淨衣を絞  
りて、滴る涙を見て、祝ふとは、ものに狂  
へる様ながら、俗人に對して無常をの



茶 一 住 の た み る 土 藏

ぶるを禮とすと聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。  
それとは些か變りて、己等は俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、

俗事(せうじ)の骨頂

衆苦充滿

骨頂

たぐふ  
から風  
あるべきやう

鶴龜にたぐへての祝づくしも、厄拂の口上めきて空々しくおも  
ほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑屋は、屑屋のあるべきやうに門  
松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなただ  
せになん迎へける。

こそ

この五月に生れたる我が娘に、一人前の雑煮の膳を据ゑて、  
這へ笑へ二つになるぞ今朝からは、このわが子にせつなま

二 やせ 蛙

元日の朝が一片の雲もなく、海もつかつかと平線までからりとすみ渡つた、浅黄の空の美し  
元日や上々吉の浅黄空

輕井澤

のどかさや浅間の煙畫の月  
笠でするさらばさらばやらす霞

家の前の清水が、氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり  
家の前の清水が氷河にうりやうり

一六 涼しい心

前田慧雲

前田慧雲  
三重縣の人、佛教學者、文學博士、昭和五年歿、年七十四。  
深草  
京都市伏見區深草町。

元政法師  
京都の人、日蓮宗の高僧、寛文八年(三三〇)寂、年四十六。  
大徳

煩惱

石川丈山  
初名は重之、徳川家康に仕へ、大阪の役に従ふ、後京都に閑居す、詩に長ず、寛文十二年(三三三)歿、年九十。



元政法師

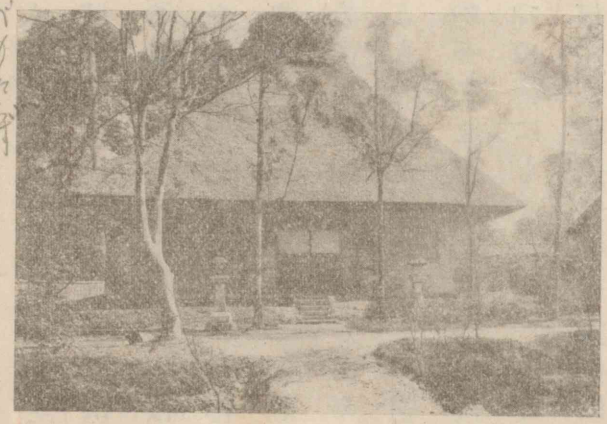
昔深草の元政法師といふ日蓮宗の大徳があつた。今の深草の瑞光寺は、この人の住んでゐた寺である。この寺の模様は、まるで幽静な禪寺の様で、風流清淨實に何ともいへぬ崇高な趣がある。一歩門内に入ると、騒々しい世間の俗塵を離れた様な氣がする。京都には古刹も名山も多いが、煩惱氣のない所は、かの石川丈山の詩仙堂と、この寺の二つであると思ふ。寺には元政法師の墓があるが、これといふ石塔もなく、竹が三本植ゑてあつて、その傍に筥が一本あるだけである。寺の衆の話によると、これは法師の遺言ださうである。この墓でも、その人となりを知ることが出来る。

壁書

惟然坊  
本名は廣瀬清右衛門、美濃國(岐阜縣)の人、芭蕉の門人、正徳五年(三三三)歿、年未詳。

むづかし  
天窓

の墓でも、その人となりを知ることが出来る。又寺に、上人の壁書といふものがある。一説には上人の作ではなく、惟然坊の作であらうともいふ。とにかく、一讀すると、氷水の一杯も飲んだやうな氣がして、誠に世界が樂になる。その壁書は、不幸にして世に背ける墨の衣にはあらず、頭髮結ぶがむづかしさに天窓を剃る。茅萱の軒端竹の柱に、身を輕うこゝに止めて、浮世を見るに、東西に走り南北に行く人、多くは身を思ふ業にのみ足を空になして、吉野の花のあはれも知らず、深草の鶉の聲を聞い



瑞光寺

惠心

法諱は源信、大和國(奈良縣)の人、天台宗の高僧、比叡山惠心院に住せしにより惠心僧都と稱す、彫刻をよくす、寛仁元年(六七)寂、年七十六。後生を願ふ

埒あく

依怙

ては、焼いてしてやりたしとばかり思ひ、後にはなんとなることぞ。楽しんで安からざるこそ人間のみに限らず、山を出づる雲は雨を催す爲に忙がしく、深林の鹿は妻戀ふる爲に聲を限りに鳴く。それを思へば、この身ほど長閑なるものはなし。惠心の作一體もてども、後世を願ふ爲にもあらず、持傳へたる道具なれば、御宿申すまでなり。極樂へ往きたしと思ふ欲なければ、地獄へ行くおそれもなく、死ぬるまで生きてゐようと思へば、年齢のよるをへちまとも思はず。まがきの朝顔が曲らうとすぢらうと、あんなものぢやと思ひ、日暮のさ夜嵐が吹かうと降らうと、我が身ひとつの苦にもならず。膝を容るゝ二疊敷、土鍋ひとつにて埒あけん。雑煮食はぬ者には聞かれまいといはぬ鶯が初音を心よく聞き、金を持たぬ家には光射すまいともいはぬ依怙最眞なき窓もる月を眺め、寝る筈

彷徨

娑婆

翫味

旨味

大局

の眼なれば晝も寢、歩く筈の足なれば、手のやつこ足の乗物にて、心の行く處を彷徨ひあるけども、盗みせぬ身なれば人も咎めず。覺えたることなければ忘るゝことなく、年を數へねば幾年やら知らず。

なんぢやかぢや娑婆ぢや浮世ぢや苦ぢや樂ぢや神

ぢや佛ぢやいふもくるしや

といふのである。よく心をおちつけて翫味すると、何ともいはれぬ旨味がある。お互がかういふ氣になつてゐたら、樂でもあらうし、涼しくもあらう。些細な出來事に氣をあせつて騒ぎまはり、遂に大局を誤るといふやうな失敗も、確に少ないであらうと思ふ。

(楽しい人生)

和辻哲郎

兵庫縣の人、哲學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十二年生。

一七 樹の根

和辻哲郎

しをらしい

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、あまり考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、長いなじみである松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちつゝいた潤のある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗かな生の喜びがそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。をりふし可愛い小鳥の群が活き活きた聲で囀りかはして、緑の葉の間を樂しさうに往來する。——それが私の親しい松の樹であつた。

針葉

まざく

心臓で感ずる

或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中に食込んだ複雑な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が何と甚だしく相違してゐることであらう。一本の幹と、疎に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と——それに比べて地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝へと分れて、亂れた女の髪髪の如く、地上の枝幹の總量總量の割合よりも多いと思はれる。太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つては、あつた。しかしそれを目の前にまざくと見た時には、思はず驚異の情に打たれぬわけにはゆかなかつた。私は長いなじみの間に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。



地下の營

可能

た。彼の苦しさを顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に歸つて、苦しみの痕をめたに殘さない。しかも彼等は、我々の眼に秘められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな勞苦の上のみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感じるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實としか思へなかつた。

或年、私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた

高野山  
和歌山縣伊都郡に在り、僧空海この地に金剛峯寺を創む。  
不動坂  
和歌山縣伊都郡。

莊嚴

弘法大師  
僧空海の諡、眞言宗の開祖、承和二年(四九三)寂、年六十二。  
見識

金剛不壞

ひたく

強靱

時に、數知れず立竝んでゐるあの太い檜から、何ともいへぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほど、これは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つくづく敬服するやうな心持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほど、どつしりとした、迷のない、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひたくと人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營は、既に地上一尺の處に明らかに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な

威壓 敬虔

没頭

根は力かぎり四方へ擴がつて、地下の岩にしつかりと抱きついでるらしい。あの巨大な樹身木のみなみにふさはしい根は、一體どんなになつてゐるだらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雑に絡みあつてゐる有様は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。確に山は烈しい生の力の營によつて、残る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見ることは出来なかつたが、しかし一種の靈氣レイキとして感ずることは出来た。隠れたる努力の威壓が神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營に没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くはない。

成長を欲するものは、まづ根を確におろさなくてはならぬ。上に延びることをのみ欲するな。まづ下に食入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて、急に美しい花を開き、豊かな實を結ぶ人がある。下に食入ることに没頭してゐたからである。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は、味はふほど深い味を示してくる。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に註文どほりの果實を結ぶだらうかと

墮す

人工的

由緒（われ）

かすべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で繊細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出来ない。

天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。偉大な物に對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

根のためには、出来るならば、地の質を選ばなくてはならぬ。

果實のためには、出来るならば、根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。教養は培養である。それが有効であるためには、まづ生活の大地に食入らうとする根がなくてはならぬ。

光明り運を考へて、自分の人の歩むべき道を、汝の根に注意を集めよ。

（偶像再興）

教養

# 一八大塔宮

## 一 高嶺の雲

大塔宮  
 後醍醐天皇の第二皇子護良親王、建武二年（一九五）薨、御年二十八。  
 主上  
 後醍醐天皇。  
 虎の尾を  
 「心之憂危若踏虎尾、涉于春水。」  
 （書經）  
 鶉の床  
 「風はらふ鶉の床は夜寒にて月かけ淋し深草の里（新千載集、恒明親王）  
 一乘院  
 奈良、興福寺の末寺。  
 候人

\*大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞しめされんために、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ、御身の上に迫りて、天地廣しと雖も、御身を藏さるべき所なし。日月明らかなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を悩まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくてもしばしはと思しめされける處に、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節宮に付き奉りたる人

おし肌脱ぐ

大般若  
大般若波羅蜜多  
經、全六百卷、唐  
の僧玄奘三藏の譯  
せし經文。

かつく

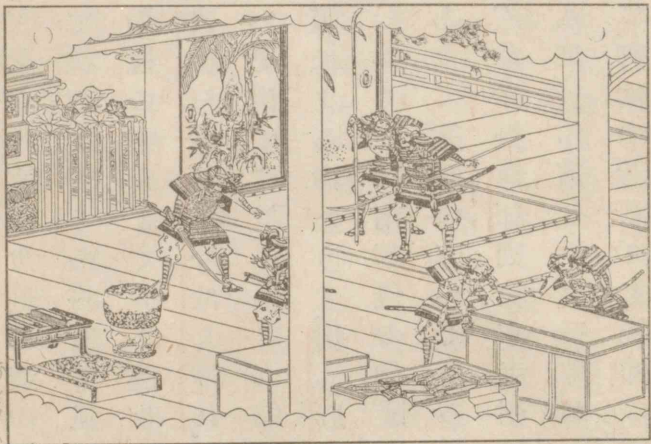
隱形の呪

やがて

一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもな  
かりける上、隙間もなく兵已に寺内にうち入りたれば、紛れて御  
出あるべき方もなし。さらばよし自害せんと思しめして、已に  
おし肌脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらん期に臨みて、腹を切  
らん事はいと易かるべし。若しやと隠れて見ばやと思しめし  
返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若  
の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず、一つの櫃は御經  
を半ばすぎ取りいだして、蓋をもせざりけり。この蓋を開けた  
る櫃の中に、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづ  
きて、隱形の呪を御心のうちに唱へてぞおはしける。若し搜し  
いださるれば、やがて突立てんと思しめして、氷の如くなる刀を  
抜いて、御腹にさしあてて、兵、こゝにこそ。といはんずる一言を待  
たせ給ひける御心のうち、推しはかるもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下天井の上までも残

これ體の物



(圖插會圖記平太) 圖ふ給れ免を難危に寺若般都南宮塔大

る所なく搜しけるが、餘りに求め  
かねて、これ體の物こそ怪しけれ。  
あの大般若の櫃を開けて見よ。と  
て、蓋したる櫃二つを開いて、御經  
を取りいだし、底を翻して見けれ  
どもおはせず。蓋開きたる櫃は  
見るまでもなしとて、兵皆寺中を  
出でさりぬ。宮は不思議の御命  
をつがせ給ひ、夢に道ゆく心地し  
て、なほ櫃の中におはしけるが、若  
し又兵立ちかへり、委しく搜す事  
もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たり

覺束なし  
 玄奘三藏  
 支那唐代の高僧、俗姓は陳、貞觀三年西曆六五〇印度に入り佛敎を究め、歸國の後經典の翻譯に従事す。(西曆六〇二—六四六)

摩利支天  
 護國護民の神として、我が國中世の武人に尊崇せらる冥應

十六善神  
 大般若經の守護神



巾頭



山伏

つる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く兵ども又佛前に立返り、前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。とて御經を皆うち移して見けるが、からくとうち笑うて、大唐の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮はいらせ給はて、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては、南都邊の御隱所も叶ひ難ければ、即ち般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊赤松律師則祐木寺相模岡本三河房武藏房村上彦四郎片岡八郎矢田彦七平賀三郎、これ以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ざるを先達につくり立て、田舎山伏の熊野參詣する體

龍樓鳳闕  
 華軒香車

氣色

勤修



濱木綿

にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕のうちに入とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねては心苦しと思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ船の機緒たえ浦の濱木綿幾重と



雨を含める……  
「出關愁暮一沾  
裳、滿野蓬生古戰  
場、孤村樹色昏、  
殘雨、遠寺鐘聲帶  
夕陽。」(盧綸)

兩所權現  
熊野の本宮と新  
宮。

玄鑿  
應作

丹誠無二



も知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれ  
る磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさ  
らでだに、長汀曲浦の旅の路心を碎くならひなるに、雨を含める  
孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王  
子に著き給ふ。その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、終夜祈り  
申させ給ひけるは、傳へ承る兩所權現は、これ伊弉諾伊弉册の應  
作なり。我が君その苗裔として、今朝日忽ちに浮雲のため、に隠  
されて冥闇たり。豈傷ましからずや。玄鑿空しきに似たり。  
神若し神たらば、君何ぞ君たらざる。と、五體を地に投げて、一心に  
誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應など  
かあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈  
ありければ、御腕を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御  
夢に鬢結ひたる童子一人來たつて、熊野三山の間は、なほも人の

山路……  
「菟溪出白石、天  
寒紅葉稀、山路元  
無雨、空翠濕、人  
衣。」(王維)  
見上ぐれば……  
「向上則有青壁萬  
尋、向下則有碧潭  
千仞。」(遊仙窟)

心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御渡り候  
うて、時の至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附  
けまゐらせられて候へば、御道しるべ仕るべく候。と申すと御覽  
ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、頼  
もしく思しめされければ、未明に御悦びの奉幣を捧げ、やがて十  
津川を尋ねてぞ分けいらせ給ひける。その道の程三十餘里が  
間には絶えて人里もなかりければ、或は高嶺の雲に枕を欬て、苔  
の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を  
消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を潤す。見上ぐれ  
ば萬仞の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日  
の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れはてて、流る、汗  
水の如し。御足は缺けそんじて、草鞋皆血に染れり。御供の人  
人も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑつかれて、はかしくも

歩み得ざりけれども、御腰を押し御手を引いて、路の程十三日に十津川へぞ著かせ給ひける。

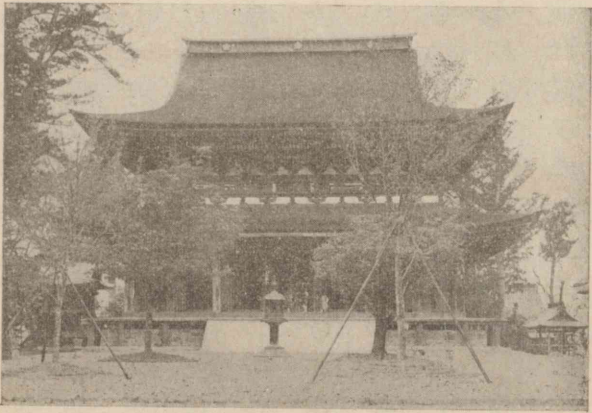
二 藏王堂

さるほどに、搦手の明神の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間、大塔宮よせて、宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間、大塔宮の鎧のまだ巳の刻なるを、透間もなく召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立て、敵の群がつて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ、南北へ追ひまはし、黒煙を立て、切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅かの小勢に切立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつとひく。

搦手 勝手の明神 奈良縣(大和國)吉野にあり、現今は山口神社と稱す。 藏王堂 吉野なる金峯山寺の本堂、藏王權現堂ともいふ。 巳の刻

二の腕

敵ひけば、宮は藏王堂の大庭になみゐさせ給ひて、大幕うち揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬先の二



藏王堂

の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し。然れども立つたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大杯を三たび傾けさせ給へば、木寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて、宮の御前に畏まり、戈鋌劍戟を降らす事、電光の如くなり。磐石岩を飛ばす事、春の雨に相同じ。然りとは雖も、天帝の身に

天帝 帝釋天。 修羅 阿修羅王。

は近づかて、修羅彼がために破らるゝとは、やしを揚げて舞ひたる

漢楚

漢は漢の高祖、楚は楚王項羽。

鴻門

陝西省西安府。

樊噲

漢の高祖の臣。(西曆前?前二八七)

大手

木戸

有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝけて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。  
大手の合戦今急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにもその戦に自ら相當る事多かりけりと見えて、村上彦四郎義光鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、大手の一の木戸いひがひなく攻破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるに就いて參つて候。敵已にかさに取りあがりて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てん事、今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を他所へ廻し候はぬ前に、一方よりうち破つて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し後に残り留つて戦ふ兵

恐れある事

物具

御諱

滎陽

河南省開封府。

いふがひなし

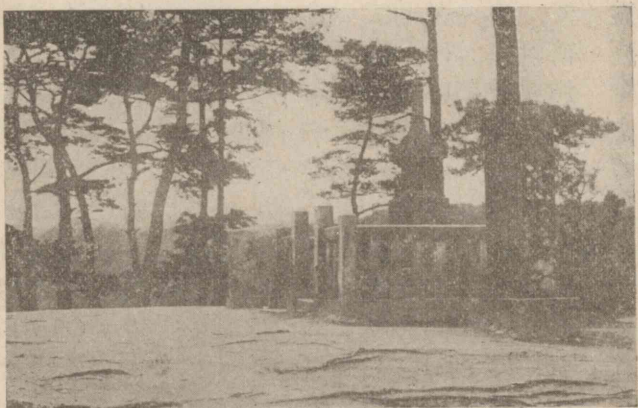
所存

うたて

なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけ參らせんと覺え候へば、恐れある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り參らせ候はん」と申しければ、宮いかにかてかさる事あるべき。死なば、一所にてこそともかうもならぬ。と仰せられけるを、義光詞をあらゝかにして、かゝる淺ましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖のまねをして楚を欺かんと請ひしに、高祖これを許し給ひ候はずや。かほどにいふがひなき御所存にて、天下の大事を思しめし立ちける事こそうたてけれ。はやその御物具を脱がせ給ひ候へ」と申し、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもと思われしけん、御物具、鎧直垂まで脱ぎかへさせ給ひて、われ若し生きたらば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ道に伴な



逆臣  
泉下



村上義光の墓

ふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせ給へば、義光は二の木戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉りて、宮の御後影のかすかに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を切落し、身を現して、大音聲を揚げて名のりけるは、天照大神御子孫神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽ちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。」といふ

練貫

搦手  
すはや

天の川  
奈良縣(大和國)吉野郡十津川の上流。

太平記  
四十卷、吉野時代に成りし戦記物語、後醍醐天皇文保二年(一九八)より、後村上天皇正平二十二年(三三三)迄五十年間の出来事を記す、作者未詳。

まゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二つ小袖をおし肌脱いで、白く清げなる肌、刀を突立て、左の脇より右の側腹まで一文字に掻切つて、太刀を口に銜へて、うつぶしになつてぞ伏したりける。

大手搦手の寄手これを見て、すはや、大塔宮の御自害あるは、

我先に御首を賜はらん。」とて、四方の圍を解いて一所に集る。その間に宮はひき違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。(太平記)

熊野にて

み熊野のあら山中に海なして立つ朝霧をいくへ

わくらん

雲た、む岩ね松がねゆく水のよど瀬にかゝるむ

ら時雨かな

鯨とる熊野の船の八十つぶき花も紅葉も浦にこ

そあれ

(加納諸平)

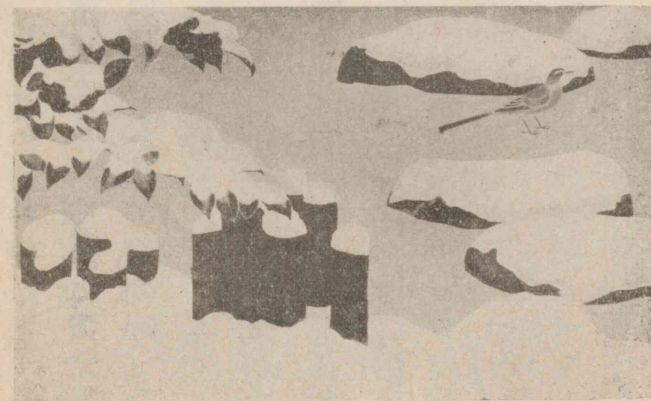
綱島梁川  
名は榮一郎、岡山  
縣の人、哲學者、  
文學者、明治四十  
年歿、年三十五。

一九雪聲

綱島梁川

今年如月の或日、あかつきの夢ふと  
さわやかに覺めぬれば、紙窓一白、外面  
は寂として、鳥の聲々のみいとゞ寒げ  
なり。

静かに聽けば、折々しきる庭の竹樹  
の聲やなに。或はせゝらぎてゆく小  
川の音の斷えつ續きつする如く、或は  
そよろとすべる衣桁の衣のけはひに  
通ひ、或は砂山くづるゝ軟砂の水面に  
落ちぬるかとおやまたる。  
風ありや、なしや、朝日いまださし昇



(筆郎八平田福) 庭雪

しきる

そよろ

けはひ

沈々  
夏々

あからむ  
まもる  
たれこむ

現し世  
他界

らず。刹那は沈々として四境深きが如く、忽ちまた夏々として  
聲あり。急語はあらゝかに、緩語はなめらかなり。袂を排して  
起ち、窓おしあけて、あからめもせて白妙の世をうちまもらんも、  
いと心なき業なるべし。たれこめて、こゝにして、しばらくこの  
奇しきゆかしきおとづれを冥想せしめよ。

あはれ夢かとたどらるゝこの境、この心。譬へばわれらが人  
生の旅路に於て、薄明なる現し世の紙窓一重を隔てて、しばゝ  
他界神祕の消息に心うち躍るにも似たるかな。  
(梁川全集)

下京や雪つむ上の夜の雨

凡 兆

大雪となりけり關のとざし時

燕 村

長橋の行くさきかくす吹雪かな

太 祇

二〇 三顧の恩

土井晚翠

土井晚翠  
名は林吉、宮城縣  
の人、英文學者、  
詩人、明治四年生。

南陽  
諸葛亮（孔明）の  
隱栖せし地。

王佐の才

梁父吟  
諸葛亮の詩。

閑雲野鶴

嗚呼、南陽の舊草廬、  
二十餘年のいにしへの  
夢はたいかに安かりし、  
光を包み香をかくし、  
隴畝に民と交れば、  
王佐の才に富める身も  
たゞ一曲の梁父吟、  
閑雲野鶴空ひろく  
風に嘯く身はひとり、

月を湖上に碎きては  
ゆくへ波間の舟ひと葉  
ゆふべ暮鐘に誘はれて  
訪ふは山寺の松の風。

江山さむる曙の  
雪に驢を驅る道の上、  
寒梅瘦せて春早み  
幽林蔭を穿つとき  
伴は野鳥の暮の歌、  
紫雲たなびく洞の中  
誰ぞや棊局の友の身は。

棊局

きほふ

臥龍  
「先主屯新野、徐庶見先主、謂先主曰、諸葛孔明臥龍也。」(蜀志、諸葛孔明傳)

その隆中の別天地、  
空のあなたを眺むれば  
大盗きほひはびこりて  
あらびて榮華さながらに  
風の枯葉を掃ふごと、  
治亂興亡おもほへば  
世は一局の碁なりけり。

その世を治め世を救ふ  
經綸胸に溢るれど、  
榮利を俗に求めねば  
岡も臥龍の名を負ひつ、  
亂れし世にも花は咲き

花また散りて春秋の  
遷りてこゝに二十七。

高眠

君が三たびの……  
劉備三度駕を枉げ  
て孔明に計を問へ  
り。  
羽扇綸巾

高眠遂に永からず、  
信義四海に溢れたる  
君\*が三たびの訪れを  
背きはてめや知己の恩、  
羽扇綸巾風輕き  
姿は替へて立ちいづる  
草廬あしたの主やたれ。  
古琴の友よさらばいざ、  
曉さむる西窓の

残月の影よさらばいざ、  
白鶴歸れ嶺の松  
蒼猿眠れ谷の橋  
岡も替へよや臥龍の名、  
草廬あしたはぬしもなし。

成算

成算胸にをさまりて

乾坤

乾坤こゝに一局碁

たゞ掌上に指すがごと

三分の計

三分の計はや成れば

孔明が建策せし曹操・孫權・劉備の天下三分策。

見よ九天の雲は垂れ

四海の水は皆立ちて

蛟龍

蛟龍飛びぬ淵の外。

（天地有情）

石川雅望

宿屋飯盛、六樹園と號す、江戸の人、國學者・狂歌師、天保元年（西九〇）歿、年七十八。

二一 しみのすみか物語

石川雅望

一 白髮三千丈

なか／＼

李太白集

三十卷、李白の詩集。

白髮三千丈

「白髮三千丈、綠愁如箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜。」（李太白）

學生源廣が家に童あり。常に主につきて文讀むことを習ひけり。或時家のおとなに向ひていひけるは「もろこし人はすべてあらぬいつはりごとをぞいふなる。學問の道はなか／＼世に用なし」といふ。おとな「何事のありてさはいふぞ」と問へば、童「今ほど李太白集を讀みて侍るに、白髮三千丈といへる句あり。これかぎりなき空言ならずや」といふ。おとな「あらず。わぬしがもの學びすることの足らざれば、さる疑も出てくるなり。いま大學に入りておほざうの博士の御前にて學問して見よ。さる疑ははるけん。抑かしこは我が日の本には勝りて、國も四百餘州ありとか。さる廣き所なれば、さばかり髪ながき人もあら

顔淵……  
顔淵、閔子齊共に  
孔子の高弟。

ざらんやは。わぬし論語をば讀みたるべし。かの書に、顔淵鬢  
四間とこそ見えたれ。といへば、董、げにく。といひてうなづきけ  
るとか。

二 桶屋の思案

都の端つ方に、桶を造りて賣る男あり。秋の頃風烈しく吹出  
でて、よろぼひたる家を打倒し、木の枝をさへ折りさきなどす。  
檜皮屋の板のはがれたるが空に飛交ふさま、さながらたむけの  
神に幣進らする心地す。桶づくり、妻に向ひて、わが家たからに  
富むべき時來ぬ。疾く神の御前に御酒、稗米奉りてよ。といふ。  
妻、野分烈しかりとて、家の富むべき道理やはある。けうの事い  
ふ男かな。といへば、女はあさましきまで、物の心をたどり知らぬ  
ものなり。昔唐國に朱買臣といひし賢き人、わが身今に成りい  
でなんとといひけるを、その妻の聞きもいれて、終に別れけるが、ほ

たむけの神

けうの事

あさまし

朱買臣

呉の人、家貧にし  
て讀書を好む、常  
に曰く、我年五十  
五にして富貴たる  
べしと、妻聞かず  
して去る、後、買  
臣會稽の太守とな  
る。

なでふ

どなく夫はいみじき位を得たりけるを悔みつる例もぞある。  
すべて男のいへることを、悔りざまにもてなさは、よきことはあ  
らじ。といふ。妻、さらば、かゝる風につけて、なでふよき幸かある。  
といへば、夫がいはく、風荒く吹きぬれば、砂埃起りて人の眼に入  
るぞかし。されば、眼を病む人多く出できなん。これ喜び祝ふ

杉むらのむらたち  
たかみ鳥さへもこ  
えわひぬらしあふ  
さかの關 雅望

いぶかる

ようせずば



川雅望筆蹟

べきことにこそ。といふに、妻は愈、いぶかりて、人の眼を病むが、い  
かで我が身の幸とはなる。と問へば、夫、深く物の心たどらざる人  
は、その由をえ知らじ。眼を煩ふ人多ければ、ようせずば、眼潰れ  
て、かたはとなりぬべし。さるかたはになりなば、法師とこそな  
るべけれ。盲法師は近き世に唐國より渡したる三絃といふも

なりはひ  
なるべう

のを弾きて、なりはひとすなり。さらば、三絃世の中に行はれぬべし。これ我が爲によき幸の來たれるなり。といへば、妻、しか三絃の世にはやり行くとも、身の幸となるべうもなし。といふ。夫、  
「そも三絃は、猫の皮もて造るなり。三絃のはやり行かば、世のありとある猫のかぎり、殺されてたね盡きぬべし。これよき幸のま近く來たれるなり。」といふを、なほいぶかりて問へば、猫死にたえなば、鼠時を得てはびこり、厨の棚、座敷といはず、こゝらの鼠ほこり騒ぎ、よろづの桶ども皆食ひやぶり、或はなげ落して、くだき損ひつべし。さらば、我が家に商物の數まさりて富みさかゆべきものなるをや。」と、手を打ちたゞきて、躍り喜びけり。深きたどりある桶だくみにぞありける。

三 すなほなる修行者

修行者

修行者、國々をめぐり歩き、津の國なる山路にかゝりけるに、

こゝら  
ほこり騒ぐ

つれなし

酒賣る軒の柱に人をくゝりて置きたり。盜人を捕へて殺さんとするにや、出家の身の、つれなく見すぐすべうもあらず、助けて見ばやと思ひて、酒賣る家に入りて仔細を問へば、主、あのやつは旅人にて侍り。今ほど我が家の酒を買ひ飲み、味そこねて酔けありと言ひ侍り。我が家いかで酔けある物を賣らん。さるあらぬことを言ひて、人にもふれ知らすべき者と思ひて、捕へくゝり置きて侍り。といふ。修行者、賣物をわろしと言へるに腹だたせ給へること、道理あり。されどいみじき罪にもあらざれば、今は老法師にまけて許し給ひね。さてその酒如何なる味かし、て侍る。我試みん。といへば、主まがりに汲みて出すを、修行者とて一口飲みけるが、目も眉も一つにしめて、まがりを打捨て、自ら後ざまに手をまはして、いざ我をもくゝり給へかし。とぞいひける。すなほなる修行者にぞありける。

まがり

しみのすみか物語  
二卷、石川雅望の著、年來見聞の奇談逸話を集めしもの。

（しみのすみか物語）

## 二二うた物語

### 一 關の秋風

能<sup>\*</sup>因入道、伊豫守實綱<sup>\*</sup>に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎淺からざるに、神は和歌にめてさせ給ふものなり、試みによみて三島<sup>\*</sup>に奉るべき由を、國司頻りにすすめければ、

あまの川苗代水にせきくだせあまくだります神な

らば神

とよめるを、みてぐらに書きて、神司<sup>かみ</sup>して申し上げたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりけり。忽ちに天災を和ぐることに、唐の貞觀<sup>\*</sup>の帝の、いなむしを吞めりける故事にも劣らざりけり。

能因 俗名は橋永愷、平安時代の歌僧、生歿年未詳。  
實綱 日野資成の子、生歿年未詳。  
三島 愛媛縣(伊豫國)、越智郡宮浦町に在る國幣大社大山祇神社。  
みてぐら

貞觀の帝 貞觀政要に見ゆる故事、貞觀の帝は唐の太宗。

すきもの

この入道は至れるすきものにてありければ、  
都をば霞とともにたちしかどあきかぜぞふく白河  
のせき

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて人にも知られず久しくこもりゐて、色を黒く日にあたりなし、後、陸奥國のかたへ修行のついでによみたりとぞ、披露し侍りける。

### 二 母のいのり

江舉<sup>えあき</sup>周<sup>あき</sup>和泉の任去りて後、病おもかりけり。住吉の御崇のよしを聞きて、母赤染衛門<sup>\*</sup>

代らんと祈るいのちはをしからでさてもわかれん  
ことぞ悲しき

とよみて、御幣<sup>みへ</sup>に書きてかの社に奉りたりければ、その夜の夢に

江舉周 大江舉周、大江匡衡の子、大學頭式部權大輔、永承元年(1138)歿、年未詳。  
赤染衛門 赤染時用の女、匡衡の妻、平安時代の女流歌人、生歿年未詳。  
御幣



白髪の老翁ありて、この御幣をとると見て、病癒えぬ。

三 いく野の道

和泉式部  
平安時代の女流歌人、小式部内侍の母、生歿年未詳。

和泉式部保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、京にて歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられてよみけるを、定頼中納言たはぶれに小式部内侍に、

保昌  
藤原保昌、大納言元方の孫、驍勇にして、又歌をよくす、曾て盜賊袴垂を伏せしむ、長元九年(九九六)歿、年八十一。

「丹後へつかはしける人は、参りにたりや。」

定頼中納言  
大納言公任の子、歌人、寛徳二年(七〇三)歿、年五十一。

といひ入れて、局の前を過ぎられけるを、小式部内侍御簾より半ば出でて、直衣の袖をひかへて、

局  
大江山いく野の道のとほければまだふみも見ず天のはしだて

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに」とばかりいひて、かへしにも及ばず、袖をひき放ちて逃げられにけり。小式部はこれより

あさまし

おほえ

歌よみの世におほえ出で來にけり。

四 青柳の絲

花園左大臣  
源有仁、後三條天皇の御孫、詩歌管絃をよくす、久安三年(一一七三)歿、年四十五。

花園左大臣家に、初めて参りたりける侍の名簿なまづきのはしがきに、「能は歌よみ」と書きたりけり。おとゞ秋の初に南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子に人参れ。」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はず。」と申し、この侍参りたるに、「たゞさらば汝おろせ。」と仰せられければ、参りたるに、「汝は歌よみな。」とありければ、かしこまりて、御格子おろし、さして侍ふに、「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せられければ、「青柳の」と初の句を申し出したるを、さぶらひける女房たちをりに合はずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「物を聞きはてずして笑ふやうやある。」と仰せられて、「とくつかうまつれ。」とありければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて夏へて秋ははたおりぞなく

と詠みたりければおとゝ感じ給ひて萩おりたる御直垂おし出し、賜はせけり。

寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにし雁がねは今ぞなくなる秋霧

のうへに

と詠める、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人こゑくゝに笑ひけり。さて次の句に「かすみこいにし」と言ひけるにこそ、音もせずなりにけれ。同じ事にや。  
（古今著聞集）

寛平

宇多天皇の御代の年號。西元一五七

友則

紀友則、歌人、古今集撰者の一、生歿年未詳。

はる霞

古今集卷四秋の部に見ゆ。

古今著聞集

二十卷、鎌倉時代初期に成りし説話集にして、橘成季の著。

### 二三 大和國原

上田秋成

上田秋成  
本名は上田東作、大阪の人、歌人、國學者、文化六年（一四六）歿、年七十六。

思ふことあらぬ枕に花の香のあさらにかをる春の  
あけぼの  
香具山のをのへに立ちて見わたせば大和國原早苗  
とるなり  
（藤篋冊子）

加納諸平

加納諸平  
本姓夏目、遠江國（静岡縣）の人、國學者、歌人、安政四年（一八五）歿、年五十二。

沖さけてうかぶ鳥舟時のまにかけりもゆくか鯨見  
ゆらし  
雲かゝるわたのみなかにあら潮を雨と降らせて鯨  
うかべり  
（柿園詠草）

大隈言道

大隈言道

本姓清原、筑前國（福岡縣）の人、歌人、明治元年歿、年七十一。

釣舟

よそよりも今や釣  
(る)かともつもの  
をところかへたる  
沖のあまふね言道

平賀元義

備中國(岡山縣)  
の人、歌人、國學  
者、慶應元年(三五五)  
歿、年六十六。

こたへする聲面白み山彦をかぎりもなしによぶわ  
らはかな  
ひきつれて大路いづなり馬くるま又馬くるま牛く  
るま牛

大隈言道筆蹟

夕日影なかばも海に入る時ぞうねく光る沖のさ  
ざ波

(大隈言道集)

平賀元義

大君の加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠吹  
き放つ  
こゝに來て昔思へばものゝふの射るや屋島に浪立

ちさわぐ

まさかゞみ清き月夜に兒島の海逢崎山に梅の花散  
る

(平賀元義歌集)

橘曙覽

すくくと生ひたつ麥に腹すりて燕飛び來る春の  
山畑

橘曙覽筆蹟

五言  
これたにもうれし  
かりけりあやめく  
さむかしのためし  
ひくと思へは

曙覽

兒島の海  
岡山縣兒島灣

橘曙覽

志濃夫廻舎と號す  
越前國(福井縣)  
の人、歌人、明治  
元年歿、年五十七。

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげに走る西へ  
東へ  
たのしみはまれに魚煮て兒ら皆がうましろましと  
いひて食ふ時

(橘曙覽全集)

良寛

俗名山本榮藏、大  
愚と號す、越後國  
(新潟縣)の人、天  
保二年(西二)歿、年  
七十四。

良寛

かすみ立つ長き春日を子供らと手毬つきつゝこの  
日くらしつ  
路のべに莖つみつゝ鉢の子を忘れてぞこしその鉢  
の子を

あきもやよさむ  
になりぬわかかと  
のつゝれさせてふ  
むしのごとする

あきもやよさむ  
になりぬわかかと  
のつゝれさせてふ  
むしのごとする

蹟筆 良寛

月讀の光を待ちて歸りませ山路は栗のいがの多き  
に  
夜もすがら草のいほりにわれ居れば杉の葉しぬぎ  
霰降るなり

—(良寛和尚詩歌集)—

高須芳次郎

大阪市の人、歴史  
家、評論家、明治  
十三年生。  
機械的

二四 労働の一日

高須芳次郎

労働は尊重すべきものだ。労働の一日は、たとひそれが機械  
的に流れるにしても、無意味なものではない。各自額に汗して  
衣食する事は、人間の最大愉快事である。そしてその一日は祝  
福された一日だ。する事もなく、動くこともなく、責任もなく、唯  
その日を夢のやうに暮す者は、外面から見ると極めて安樂のや  
うだが、決してさうではない。この種の人々は、自己の無爲に苦  
しめられ、無用の妄想にその一日を重荷のやうにしてしまふ。  
そしてかうした人々の心身は、次第に緩んで、抵抗力や反應力を  
失つて、魂のない人形と化してしまふ事が多い。

これに比較すると、労働する者の心身は、精力を濫費しない限  
り、常に緊張し、錬磨される。その一日は精神的にも、肉體的にも

反應力

## 皮相的

或程度まで充實する。かうして刻々に過ぎて行く時を送迎するのは愉快である。能く労働する者の身體は常に健やかだ。多忙な爲に病むやうな事は少ない。そして労働の後に得る休息は、光輝に満ちた平和の樂園に等しい。

人生を皮相的に見る者は、車を牽いて坂を登り行く者や、路傍に働く工夫を見て、とかく侮蔑する。けれどもそれは誤つてゐる。彼等は勿論精神上の愉樂を知らぬかも知れぬが、無爲の寂しさと悲しさとを知らない。適當の労働をした後、一碗の粗食に舌鼓うちつゝ、その日の疲勞を忘れる快さは、獨り彼等の領する所である。

私は労働を讚美する。しかし、労働その物に没頭して自己の精神的進化を忘れたくはない。たとひ機械的な生活を送るにもせよ、或程度の内省を忘れたくはない。全然物質化したくは

ない。

人間はともすれば自己に就いての思索を忘れて、無意義に近い内容に乏しい一日を送ることが往々ある。かくすればとて誰もそれを咎めようとはしないけれども、靜かに考へると、何となくその精神的に貧しい一日が、恐らく我が心の髓を腐らしてしまひはせぬかと戰慄することがある。

しかも、この鋭い内省が何人にも長く續くことは少ない。ともすれば眼前の事に制せられ、心身の疲勞に壓倒されて、自ら姑息な平安に馴れようとする場合が多いのを悲しまずにはゐられない。眞に人生の大道を歩まうとする事は、正直な労働と共に有意義な思索を續けて、淺薄な小さい自我を深め、強め、道義的にも、哲理的にも深刻ならしめねばならない。これがその日その日の充實した心の糧となるのである。

—(著 空)—

## 姑息

薄田泣菫

本名は淳介、岡山縣の人、詩人、隨筆家、明治十年生。

はゆま路

宮津

京都府與謝郡宮津

町。

由良

京都府加佐郡由良村。

切戸

切戸の文殊堂のこと、京都府與謝郡吉津村大字文殊の海濱、天橋立の南方にあり。

二五思出

薄田泣菫

春の夜はしづかに更けぬ

はゆま路の竝木のけぶり

箱馬車は轍をどりて

宮津\*より由良\*へ急ぎぬ

朧夜の窓のあかりに

京むすめ難波商人

朽く尼にや切戸きりまうてや

人の世の旅の道づれ

物がたりおくびまじりに

眠り目のとろむとすれば

誰が子にかしりへの方に

をりからの追分節や

清らなる聲ひとしきり

溪あひのさゝら水なみ

咽び音に響きわたれば

乗合は涙こぼれぬ

月落ちて闇の夜ぶかに

箱馬車は由良へとゞきぬ

客人は車をおりて  
西東みちに別れぬ

その後や幾春へけん  
おほかたは夢にうつゝに  
しのびてはえこそ忘れね  
由良の夜の追分上手

えこそ忘れね

その子いま何處にあらん  
おもひでの清きかたみや  
人々のこゝろに生きて  
とことばに姿ぞわかき

—(二十五終)—

五十嵐力  
山形縣の人、國文  
學者、文學博士、  
早稻田大學教授、  
明治七年生。

基調  
總攝

### 二六 國語の愛護

五十嵐 力

私は、國語を豊かに、又統一あるものにしたと思ひます。今  
後の國語國文は、大體に於て、現代の口語を本位とすることに  
りませう。これは當然の事でありますが、唯口語の一方に執著  
して、他の要素を一切排斥するといふことは、將來の國語を貧  
弱にし、狭小にする憂がありますので、私は是非現代の口語を本  
位とし、基調として、廣く衆美を總攝する。といふ事に、標準を置き  
たいと思ひます。

本來我々の思想はその生れた國、生れた時代の言葉で現さる  
べきものであります。支那人の思想は支那語で現され、英國人  
の思想は英語で現されるのが自然であり、又平安時代人の思想  
が王朝言葉で現され、鎌倉時代人の思想が鎌倉言葉で現される

本居宣長  
伊勢國の人、國學  
者、享和元年(西六)  
歿、年七十二。

のが自然であると同じやうに、明治・大正・昭和時代の日本に生れた我々の思想が、明治・大正・昭和時代の日本語で現されるのは當然の事、自然の事でありませう。本居宣長が「古事記傳」に、心持と事柄と言葉との三つが調和して助け合はねば、立派な活きた文章は出来ぬと説いたのは、そのためであります。

又、言語・文章の推移・變遷は、話し言葉が魁をなして、書く方の文章がその後を追ふのが普通であり、書く文章の中では、散文が魁をなして、詩歌がその後を追ふのが普通であります。そして散文の中では、文學的文章が魁をなして、普通の文章がその後に續くのが普通であります。明治の口語文は、最初に小説に現れましたが、だん／＼普通文に現れるやうになり、續いて韻文に現れるやうになり、役所向きの公文書にまで及ぶやうになりました。この大勢から見れば、昭和今後の標準文章が口語式に歸一すべ

散文

韻文

きことは、疑のない事と云つて差支ありませんまい。

さて、その口語文の如何なるものなるべきかに就いては、いろいろの説があります。その中で最も多いのは、口語文は今の人の話す通りに書くべきもの、文字通りに口語そのまゝか、或は口語に少し磨きをかけた程度に書くべきもので、古語や外國語を取入れるべきものではないといふ考で、この考を持つてゐる人の中には、古語を取入れ、或は漢語などを取入れると、いかにも取るべからざる物を取つたかのやうに思ふ人が澤山あります。併し口語文の意義・本質・理想を談話のまゝの純口語乃至準口語に限るのは、自ら低くし、狭くし、貧しくし、卑しくする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものであります。私は口語を本位とし、口語に基調を置くといふだけで、その本位を冒さず、基調に合し得る限りは、古今東西のあらゆる言葉・文體



消息

を攝取して、自らを肥し、豊かにすべきものであると考へます。我々が父祖の遺産を繼承する場合の事情が、丁度これと同じではありませんか。我々は親の財産を受け継いで、自分の理想を實現するため、それを活用し、尙その上に他からいろ／＼の要素を取入れて、大きくして子に傳へ、子は同様の方法により、更に大きくして孫に傳へるべきでせう。新しい國語國文樹立の消息も同じ事で、唯、その基調を外すか外さないかが問題であります。如何にしてその基調を外さずして、多くの他の要素を攝取し得るかが問題であると思ひます。

音曲

基調は何物にもありませんが、假に音曲發聲の方面に就いて見るに、謠曲・淨瑠璃・琵琶歌等、皆その音の高低なり音色なりに、一種の基本となるべき調子があつて、前代或は同時代の他の音曲をその中に攝取する時には、皆これをその基本調子に化し、即ち

反を合はす

從屬せしめるために、その音曲が獨立した高い價値を持つことになるのであります。そして他の要素を我が基本調子に化する呼吸は、向うの特色を取りながら、その角を倒して、我に反を合はさしめるにあると思ひます。「平家」が謠曲に取入れられる時には、「平家」の特色をば見せながら、謠曲に馴染むやうに、その角が倒されました。謠曲が淨瑠璃に取入れられる時には、同じ謠曲の特殊味を見せながら、淨瑠璃の基調に馴染むやうに、その角が倒されました。いはば、本曲の主位を立てて、穩かに從位につくといふ呼吸で、例へば日本文に英語を挿む時の読み振、英文に日本語を挿む時の読み方の呼吸等が、丁度それだと思ひます。日本文の間に挿入する英語を、英語そのまゝの發音やアクセントで讀んだら、變なものでせうが、英語は英語ながら、日本風の發音アクセントにしてしまふから、即ち我を主位に立て、英語を從屬

アクセント

的なものとするから、それで立派な日本文として讀まれ、又、日本語だけよりは、却つて變化に富んだ趣の多い日本文として賞されることになるのであらうと思ひます。

要するに、外國語でも、これを日本文の中に挿入する時には、その主位を奪ひ、角を倒して、日本文に馴染ませればよいので、同じ道理で、古語を現代口語文の中に加へる時にも、その主位を奪ひ、角を倒して、口語の基調に馴染ませればよいわけであらうと思ひます。そしてそれが寧ろ現代口語文の大を成し、變化を添へ、趣味を豊かにする所以であらうと思ひます。又、これが實際各時代の我が文學の常にやつて來たことでありました。例へば、「平家物語」の一節、清盛の淨海が熱病に罹り、大苦しみをして死ぬところの光景を描いた一節に、

「もしや助かると、板に水を置きて臥しまろび給へども、助か

## 悶絶覺地

る心地もし給はず、同四日の日、悶絶覺地して、つひにあつち死ぞし給ひける。」

とありますが、この中には、少なくとも質の違つた三種の言葉が混つてゐます。一つは「臥しまろび給へども」し給ひける」といふ調子の王朝語、一つは「悶絶覺地」といふ漢語、そしてもう一つは「あつち死」といふ當時の俗語であります。かやうに質の違つた三種の言葉が各、それ／＼の特色を見せながら、少しも喧嘩せず、仲よく並んで、一つの調和した空氣を成立たしてゐるではありませんか。これは王朝語を主位に立て、他の二つが反を合はせた結果でありませうが、かういふ調子で行けば、現代口語文の中に古語を入れようとも、外國語を入れようとも、また方言を入れようとも、少しも差支のないことと思ひます。

（國語の愛護）

竹越三又

名は與三郎、新潟縣の人、歴史家、文章家、貴族院議員、慶應元年(五三)生。

## 二七 南國と我が國民

竹越三又

ジョン・デービス  
イギリスの航海者  
(西曆一五〇一—一六〇五)

東印度會社  
十七世紀の初め、英國・和蘭・佛蘭西・丁抹・埃國等の諸國が、東洋貿易のために印度に設立せる會社、英國の東印度會社最も勢力あり、遂に印度に覇權を握り、これを英國王の直轄地とせり。

ポルトガル貿易前後の古い文書を調べてみると、當時の我が國民の氣性には、實に懦夫を起たせるものが多い。イギリスのジョン・デービスといふ有名な航海者が、西紀千六百五年にシンガポール附近で日本人に殺された記事を見ると、いかに日本人が、當時國家の後援なしに勢威を振つてゐたかといふ事が分る。ジョン・デービスは東印度會社の船數隻を率ゐて、シンガポール附近を航海してゐた。その時、九十九人程の日本人が乗込んでゐる僅か七十トン許りの日本船を見た。——その記事によると、日本人は勇武な民であつて、彼等が來たといふ事だけで、シンガポール附近の民はもう慄ひ戰いたのである。彼等は刀を差さなくても濟んだのである。——これは多分海賊船であらうから、

一應調査しようといふので、デービスはその船を呼止めた。日本人は從順にこれに應じて、悉く船内を見せた。米の外は何もないと言ふので、イギリス人は安心してゐると、その夜になつて日本人が二三十人やつて來て、大きな英船を見せてくれと言入れた。その時、日本人は決して無事に濟ませる國民でないから、必ずこの船を掠奪する積りに違ひないと言つて、大いに警戒せよ。と唱へた者もあつたが、船長デービスは、この小日本人が何をするものかと言つて、油斷をしてをつたところが、案の如く、二十五人の日本人は船の中に入るなり、悉く阿修羅のやうに暴れて、一船の人を悉く追ひまくり、遂にデービスを斬殺して、今は船を奪はうとした。この時、下甲板の下から水夫が短銃を持つて來て闘つて、日本人を悉く射殺してしまつた。それから英船は日本船を砲撃したが、残つてゐる日本人は一人も降参しなれば

阿修羅

土民

逃げもせず、悉く討死した。「日本人はいかにも勇武な民である。」と、敵のイギリス人が書いてゐる。この話は單に勇武の一例を挙げたのに過ぎないが、實際當時シンガポールあたりの土民は、日本人が上陸したといふと、一も二もなく降参したといふくらいである。

バンコック  
シヤム國の首府。

山田長政  
駿河國の人、シヤムに渡り、リゴール王に封ぜられ、シヤム國に勢威を揮ふ、寛永十年(三九)シヤムに歿す。

また當時オランダ人が日本に貿易に来るのに、多くは途中でシヤムに寄泊する。その時新に水夫の補充を要する事があると、バンコックで廣告さへすれば、いつでも日本人が應募して來たといふ。その頃、一番多い時には、八千人の日本人がバンコックにをつたさうである。シヤムでの山田長政の成功は、山田長政その人一人だけの事ではない。彼は無數の山田長政を代表したのに過ぎないので、當時この人の外に無名の山田長政が多數にをつた事を知らなければならぬ。或時シヤム王は、隣國と

扮装



山田長政

の戦争に日本人の従軍者を募つた。募に應じた者は僅かに六人であつたが、この六人に日本服を著せ、日本刀を差させて先頭に立て、同じ扮装をさせたシヤム人を數百人これに續かせ、そしてその後、シヤム服、シヤム刀のシヤムの兵隊を置いて、敵國指して進軍させた。日本人が加勢したと見た隣國は、直ちに降服したといふ。當時の日本人の勇武は、これくらゐ聞え渡つてゐたのである。唯勇武といふだけではない、シヤムその他では、今日支那人のする仕事を、當時は日本人が澤山やつてをつたのである。若し徳川氏が鎖國政策を執らず、海外の同胞を見棄てず、日本人が海外で屈辱を受けた場合には、せめて後押をしてその屈辱を雪がせるといふだけの事では

もしたら、支那の沿岸からシヤム・マレー半島・ボルネオあたりまでは、確に日本の國旗が疾くに樹つてをたらうと思ふ。然るに、徳川氏の唯一家の存立を計る政策に誤られて、我が國民は今日の様、に退嬰の地位に立つ事になつたのである。思へば實に遺憾の至りである。

我が先代の國民は、當時幕府の迫害を被りながらも、この通りに發展した。これは國民の自然の要求から出たものである。我が國民の歴史は、國民の利益や趣味が、南方と海洋とにある事を表現してゐるのである。これに由つて將來を考へると、我が經綸策は南進に存せねばならぬと思ふ。我が國民の執らねばならぬ方針は、既に明らかになつてゐるではないか。 —(三文文鈔)—

經綸策

## 二八 國難と皇室

渡邊幾治郎

渡邊幾治郎  
新潟縣の人、歴史家、明治十三年生。

一國の危急存亡や、國民の榮辱死生に關した國難に際して、歴代の天皇が全く御身を以て解決の衝に當らせられた烈々たる御精神と御鴻業とは、國民の何人も感動せずにはゐられない所である。

神武天皇の御東征の時には、天皇は御身を鋒鏑にお暴しになり、皇兄五瀨命は長髓彦との戦にお傷はしくも戦死なされた。

崇神天皇が天業經綸の大志を懷いて、大規模の邊土拓殖を行はせられようとして、いはゆる四道將軍を四方に派遣なされた時、選ばれた四人の將軍は、何れも天皇の御叔父や御甥などの皇族であらせられた。次いで日本武尊は十六才の少年で、女装して熊襲の本陣に侵入して、その巨魁を誅せられたが、後更に東國を

鋒鏑

天業

四道將軍  
大彥命(北國)・武  
渟川別命(東國)・  
吉備津彥命(西  
海)・丹波道主命  
(丹波)。

征して陣中に薨ぜられた。神功皇后は女性の御身を以て、海を航して遙かに新羅を征伐あそばされた。その時皇后は群臣に告げて、征伐は國の大事である。若しこれを汝等に任せて、事が敗れる時は罪は汝等に歸する。これは誠に傷むべき事である。私は女であるから、男装して征伐に従はう。若し事が成就すれば汝等と功を共にし、敗れたら獨り罪を受けよう、と仰せられたので、群臣は大いに感激したといふ。神功皇后の外征は、かゝる尊い御精神を以て行はれたのである。

上古、天下に事があれば天皇の親征し給ふを常とし、然らざれば皇子か皇后がこれに代られるのが例であつた。政權が武門に移つても、その御精神には變化がない。故に龜山上皇は元寇の難に際し、征伐は武士にお任せになつたが、御身を以て國難に代らうと、皇大神宮に祈らせられた。

世の爲に身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照し  
みるらん

とは、この烈々たる御壯心を歌はせられた御製である。後醍醐天皇が北條氏を滅して建武中興の世を開き、次いで足利尊氏に苦しめられ給うた時、天皇と終始艱苦を共にせられたのは、護良親王以下の皇子方であつた。そして護良親王は鎌倉に弑せられ給ひ、天皇は北闕を望んで吉野に崩御あそばされた。宗良親王もまた諸國に轉戦して、朝家の爲に盡させられたが、

君のため世のため何か惜しからんすててかひある  
命なりせば

と、凛々たる犠牲的精神を示された。

江戸幕府の末造、外艦が渡來して開港を迫り、天下紛々として定らなかつた際、孝明天皇は深く宸襟を惱ませられ、幾度か御寢

末造

食を減じて神に祈らせられた。宸慮の深かつた事は、實に想像の外である。天皇の御製に、

すまし得ぬ水に我が身は沈むとも濁しはせじな四方の民草

とあるのは、實に有難い大御心である。明治天皇は御在位四十五年、一日の如く政治に御精勵あそばされた。日清戦争には大本營を廣島に進め、九箇月の間、いと狭き御室に起臥せられて、軍務に御盡瘁あらせられた。侍臣が備へ附けようとした長椅子やストーブさへ、陣中にはないからと仰せられて、用ゐさせられなかつた。その兵士と艱苦を共にし、國民と休戚を分たせ給うた偉大な犠牲の御精神は、古名將聖主と雖も及ばない所である。かくの如く、國難に遭つては、天皇若しくは皇后皇子が御身を以てこれに當り、國家を率ゐさせられた事は、古今に互つて變ら

休戚

ぬ我が皇室の御本領である。さうしてこれによつて、我が國はいつも國難を脱して、今日の進歩發展を遂げる事を得たのである。

明治天皇の御製に、

天つ神さだめたまひし國なればわが國ながらたふ

とかりけり

千早ぶる神のかためしわが國を民とともに守ら

ざらめや

とある。かうした御信念を以て、天皇は國民と共に國を守らせ給ふのである。今や社會問題の解決を欲し、國民生活の安定を冀うて、ともすれば却つてこの祖國を忘れ、聖帝の大御心を顧ない様な者のあるのは、誠に過まれるもまた甚だしいものではあるまいか。

—(皇室新繪)—

## 二九 吉野拾遺

### 一 熊王の發心

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々はかられけるを、口をしくおもひこめてすぐし侍りけるに、去ぬる住吉のたゝかひに討たれて失せし宇野の六郎といひしが子に、熊王といひけるが、まだをさなき時、光範にいひけるは、「正儀は我がためにも親の仇にて候へば、いかにもしてうち侍らん。河内へ越えて、正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心を許し給ふらん事のなかるべき。たとひ心をゆるす事のはべらずとも、七とせ八とせ程も仕へ候はば、そのうちには討ちぬべきたよりの、いかでなからん。御いとまをこそ給はらめ。」と涙をながせば、光範もいとあはれと思ひながら、「をさなければ、敵の

赤松光範  
正平年中、足利義詮に従ひ吉野を攻めたる賊將。  
左馬頭  
楠木正儀、楠木正行の弟、元中年中歿、年未詳。  
住吉のたゝかひ  
正平七年(1313)、正儀、細川顯氏の陣を衝く。

こそ給はらめ

おとなし

阿部野

大阪市(攝津國)西成區より住吉區にかけて行き互る低丘陵地域の總稱。

赤坂の城

大阪府(河内國)南赤坂郡にありし楠木氏の居城。



(筆齋容池菊) 儀正木楠

國へやらんもこゝろもとなし。又は命にかはりてうたれしものの子なれば、かたみともおもふべけれ。」と、しひてとゞめ給ひけれども、「すこしおとなしくなりなば、よもちかづけ給はじ。をさなくありなん時参りてこそ。」と、しきりにぞみければ、力及び給はて、つねに身を放ち給はざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、阿部野まで、人あまた添へてやらせけるに、それよりは我にひとしきわらは一人を具して、赤坂の城にゆきて、そのほとりにたゞみでありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらん。」と、たづねければ、「我は大夫尉光範のさぶらひにて、宇野の六郎といひけるものの子に、熊王といへるもの



さかくし

恥ある一矢  
しらす

にて候。父にて侍る六郎は、去にし時住吉のたゞかひにうたれて候ふを、一門にて侍る備後守が我をおひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と心をあはせ候へば、せんかたなくて、いかなる寺へもいり侍りて、僧法師にもなり、父のあとを弔ひ候はんがために、さすらへ侍り」といひけるを、あはれときゝて、まづ我がかたに伴なひて、さまざまいたはりて後に、正儀にありつる事を語りて、をさなくは候へど、心のさかくしくて、など申すに、あはれがり給ひて、めしよせ給へり。もとよりなさけある人なりければ、熊王も思ひつきて、親のあだをもわすれけるにや、よく宮仕へにけり。十五程になりければ、河内の國にて、すこしなる所をしらさんと、いひけれども、恥ある一矢をも射候ひてこそ」とて、辭しにけり。あくる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつきて、こよひ正儀を討つて、父の手向にもし、光範の心をもやすめ奉らんとお

和田和泉守

名は正武、吉野朝の忠臣、没年未詳。

吉野殿

後村上天皇。

譜代

おほつかなし

もひたちてありけるに、その日お前にめして、けふは吉日にてあるなれば、元服せよかし」とて、和\*田和泉守にもとゞりとりあげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉\*野殿より賜はせけるよろひを賜ひければ、涙を袖にかけてよろこぶ。夜に入るまで正儀の御前に在りけるが、又ふと思ひ出でて、討ち奉らんならば、こよひこそと思ひて、膝をおし直して、正儀にめをかくれば、年比の情深かりし事、けふの元服の事など思ひつゞけて、いかで情なく討ち奉らんとおもひかへして、心をしづむれば、父の敵といひ、譜代の主君のあだといひ、一かたならねばと思ひさだめけれども、何心もなくわたらせ給ふありさまを見ければ、御いたはしくて、たへかねけるにや、廣縁に出でて、聲をあげてなきさけぶを、人々も正儀もおほつかなくおもひ給うて、障子をひらき見給へるに、伏ししづめるさまのたゞには見えずありければ、「いかにや」と問はせ

往生院  
大阪府(河内國)中  
河内郡枚岡南村に  
あり。

給ひければ、ありつる心のうちを申して、とにかくに君のため父のため、みづから死なんよりは外は候はず。とて、刀をとりなほせば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、いかでさはあらん。と、とりつきてはたらかせねば、力およばで、その刀にてもとゞりをおしきり、往生院にて形をかへ、君より賜はせる名なればとて、正寛法師とぞいひける。寺の傍に草の庵をむすびて、もしも心のかはる事のありもやせんとして、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有様をくはしく書きそへて、かへしけるとかや。いとあはれなりける事にこそ。



(筆齋谷池菊) 王 熊

二 いのり直し

菜摘の河  
奈良縣(大和國)吉  
野郡國樸村字菜摘  
附近にては、吉野  
川の一部を夏見川  
と呼ぶ。

うへ  
後村上天皇。

ことうけ

啓す

ひろなりの皇子の、未だ幼うおはしましける時に、わかき殿上人あまた伴なはせ給ひて、菜摘の河の河よどのほとりにて、鷹つかはせて御覽ありけるに、かたはらにいと大きな岩の、えもいはずおもしろきに、小松の生ひいでたるありけり。皇子御覽ぜさせて、この岩を歸りなん時、皇居の御庭にもて参れ。うへに奉らん。と、實爲中將にのたまはせければ、幼き御心をおしはかりて、御ことうけせさせ給ふ。鳥などあまたとらせ給ひて、かへらせ給へる時に、忠行侍従に、岩をわすれ給はじ。とのたまはせければ、民部大輔が力も強く侍れば、御あとよりも参り候ふなり。と啓して、皇居にいらせ給ふ。御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に、ありつる岩を。とめさせ給ひけるに、忠行の侍従のおほせごとをうけたまはりぬ。と啓し給へば、侍従をめして、いかに。とたづね

しをろ

させ給ふに、「民部大輔の御あとより、もて參らんといい侍りつる。民部をめさせ給ひなん。」と啓し給へば、むつがらせ給うて、中將にこそよくいひつれ。などさはいふにや。」としをらせ給ひければ、中將のありつる事を奏し給へば、うへにもをかしがらせ給ひて、「誠におもしろからん。岩こそ見まくほしけれ。民部が力こそゆゝしければ、もてきなんに、めさせ給へ。」とのたまはするに、中將立ち給ひて、民部大輔に、「かゝる事なんある。いかゞしてん。」とのたまへば、「すべき事こそあなれ。」とて、御庭にありけるちひさき岩に、松の枝を取りつけて、中將といと重げにもちて、宮の御前にすゑたてまつれば、「小さくこそあれ。それにはあらず。」と、なほむつがらせ給ひければ、民部大輔「さればこそ。その岩をもちて、うへの山を通り候ひしに、右、左より山のさし出でて、道いとせばきところにて、かなひ難く、いかにせましと、たゞよひ侍りしに、むかひ

ゆゝし

たゞよふ

わぶ

のかたより山伏の來たりけるが、岩にせかれて通られぬにこそ、のけ給へ。」とのゝしりける程に、「我もせんかたなさに、かくて侍る。いかにせまし。」とわびあへるに、「さらばすべき事こそあれ。」とて、珠數おしもみ、何やらんつぶやきて祈るにしたがひて、この岩小さくなりて、やすく通りて候ひし程に、山伏も行過ぎしを呼びかへして、「もとの如くに祈りなほしてん。」といひければ、「また行く先に細き道のあらんに、いかゞし給はん。」といひし程に、げにもと思ひ侍りて、そのまゝ持ちて參りぬ。」といひ給へば、うへよりはじめてありつる人々、をかしがらせ給ふに、宮の御けしきもいとよくならせ給ひて、「げにさもあらん事なり。その山伏を召しかへせかし。」とのたまはするに、「はや遙かに行過ぎて、何地ゆくらんも知らず。」と啓し給へば、「ほいなき事にこそあれ。とゞめて民部大輔の大きなる空言を、小さきやうに祈らせんものを。」とのたまはせ

ほいなし

せめて  
吉野拾遺  
二卷、後醍醐天皇  
延元元年(元弘)よ  
り後村上天皇正平  
十三年(1322)に至  
る二十三年間の事  
蹟を中心として、  
それに關する物語  
を収録す、作者未  
詳。

けり。誠に行末たのもしき御事にこそいとせめて覺え侍りし  
か。  
—(吉野拾遺)—

新編國文讀本 改制版 卷六終

辨似一覽

相似の文字の上欄は部首順に排列す  
右下の片假名は音にして左方は訓なり

且 かつ 且 かつ  
井 どんぶり 井 どんぶり  
予 われ 予 われ  
于 こゝに 于 こゝに  
亘 桓に同じ 亘 桓に同じ  
亦 また エキ  
亨 とほる 亨 とほる  
休 やすむ 休 やすむ  
伺 うかゞふ 伺 うかゞふ  
住 すむ 住 すむ  
估 あたひ 估 あたひ  
估 うかゞふ 估 うかゞふ  
侍 はべる 侍 はべる  
侯 きみ 侯 きみ  
偏 かつよる 偏 かつよる

且 あした 且 あした  
井 せいで 井 せいで  
矛 ぼこ 矛 ぼこ  
干 かね 干 かね  
互 わたる 互 わたる  
赤 あか 赤 あか  
享 けい 享 けい  
体 あらし 体 あらし  
何 なに 何 なに  
往 ゆく 往 ゆく  
佑 たすく 佑 たすく

傳 フ 傳 フ  
免 まぬかる 免 まぬかる  
競 けい 競 けい  
冠 かんむり 冠 かんむり  
冢 おほふ 冢 おほふ  
冰 こほり 冰 こほり  
冶 とかす 冶 とかす  
清 すい 清 すい  
刃 じん 刃 じん  
切 せつ 切 せつ  
刊 かん 刊 かん  
劦 さく 劦 さく  
券 けん 券 けん  
刺 せき 刺 せき  
勻 くむ 勻 くむ

傳 デン 傳 デン  
免 うさぎ 免 うさぎ  
競 けい 競 けい  
寇 あだ 寇 あだ  
冢 つか 冢 つか  
泳 およぐ 泳 およぐ  
治 ち 治 ち  
清 せい 清 せい  
办 ばん 办 ばん  
功 こう 功 こう  
刊 かん 刊 かん  
劦 あはす 劦 あはす  
券 けん 券 けん  
刺 せき 刺 せき  
勻 ひとし 勻 ひとし

己 おのれ 己 おのれ  
巳 み 巳 み  
午 うま 午 うま  
戌 づちのえ 戌 づちのえ  
戌 まもる 戌 まもる  
成 なるふ 成 なるふ  
占 うらなふ 占 うらなふ  
段 くだ 段 くだ  
口 ぐち 口 ぐち  
叨 みだりに 叨 みだりに  
吊 つるす 吊 つるす  
吝 しのむ 吝 しのむ  
呈 あらはす 呈 あらはす  
哀 かなし 哀 かなし  
哲 さとし 哲 さとし  
售 せう 售 せう  
商 しょう 商 しょう  
營 たごに 營 たごに

己 やいむ 己 やいむ  
牛 うし 牛 うし  
戌 いぬ 戌 いぬ  
古 ふるし 古 ふるし  
段 くだ 段 くだ  
口 ぐち 口 ぐち  
叩 たたく 叩 たたく  
弔 とむらふ 弔 とむらふ  
吞 のむ 吞 のむ  
呈 けい 呈 けい  
衰 おとろふ 衰 おとろふ  
哲 あきらか 哲 あきらか  
唯 たゞ 唯 たゞ  
商 しょう 商 しょう  
啼 たい 啼 たい

暗 おしん 暗 おしん  
鳴 あい 鳴 あい  
困 くる 困 くる  
土 ち 土 ち  
執 じ 執 じ  
場 ば 場 ば  
堆 たい 堆 たい  
塚 つか 塚 つか  
壁 へき 壁 へき  
壊 かい 壊 かい  
壺 こ 壺 こ  
天 あめ 天 あめ  
失 うしなふ 失 うしなふ  
本 もと 本 もと  
妹 いもうと 妹 いもうと  
字 じ 字 じ  
孟 はじめ 孟 はじめ

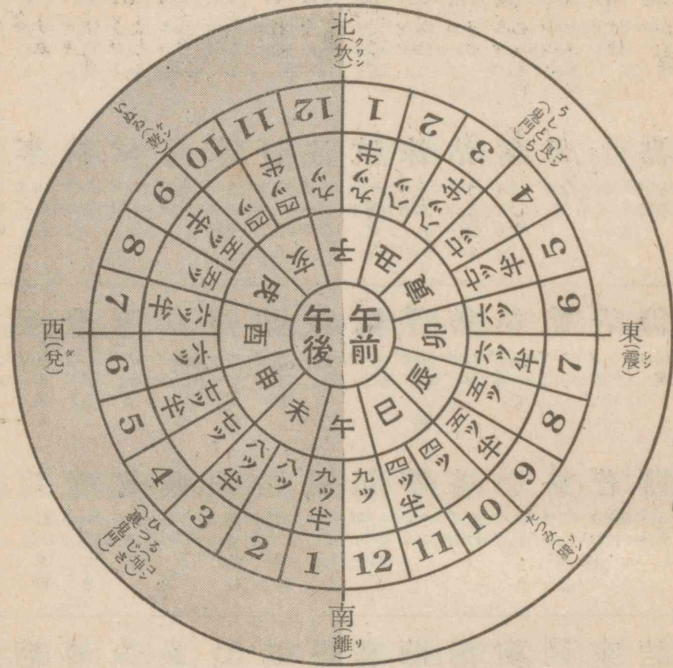
暗 くらし 暗 くらし  
鳴 なく 鳴 なく  
困 くら 困 くら  
士 じ 士 じ  
執 じ 執 じ  
場 ば 場 ば  
推 たい 推 たい  
塚 つか 塚 つか  
壁 へき 壁 へき  
壊 かい 壊 かい  
壺 こ 壺 こ  
天 あめ 天 あめ  
矢 や 矢 や  
本 もと 本 もと  
妹 いもうと 妹 いもうと  
字 じ 字 じ  
孟 はち 孟 はち

附録 辨似一覽



附録 時刻・方位・五行・十干・十二支・月の異名

時刻・方位



新編

名異の月	五行	十干	十二支
月一	木	甲	子
月二	火	乙	丑
月三	土	丙	寅
月四	金	丁	卯
月五	水	戊	辰
月六	木	己	巳
月七	火	庚	午
月八	土	辛	未
月九	金	壬	申
月十	水	癸	酉
月十一	木	甲	戌
月十二	火	乙	亥

昭和十二年五月二十六日印刷  
 昭和十二年五月二十九日發行  
 昭和十二年十二月十日訂正再版印刷  
 昭和十二年十二月十三日訂正再版發行

新編國文讀本改訂版  
 定價 卷一—六 各金六拾錢  
 卷七—十 各金五拾八錢



編者 千田 憲  
 發行者 東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地 塚田 六彌  
 印刷者 東京市板橋區志村町五番地 河合 勝夫  
 印刷所 東京市板橋區志村町五番地 凸版印刷株式會社板橋工場

發行所 東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地 右文書院

大賣捌 東京林平書店 大阪柳原書店 名古屋敎生社 久留米 金文堂

電話駒込(82)二五八〇番  
 振替口座東京七四五二八番

不火字を晴来候以烟

三系許誇樹露後半如珠

赤くはくわうさるうし

うらみのわうにもわうさるにわ  
三春  
允

けうはみそをわい法こみずの

のやまにゆいはうわ

